

静岡大学地域連携協働センター 公開シンポジウム



地域と大学をつなぐ

～メデイエイターとしての学生～

報告書



2010.3

静岡大学

地域連携協働センター・生涯学習教育研究センター

静岡大学地域連携協働センター 公開シンポジウム

地域と大学をつなぐ ～メディアイーターとしての学生～

■日時

2010年1月23日（土）14:00～17:00

■会場

静岡パルシェ会議室（静岡駅前ビル・パルシェ7階）

■パネリスト

片桐隆嗣

（東北芸術工科大学芸術学部教授、こども芸術教育研究センター長）

竹之内裕文

（静岡大学創造科学技術大学院准教授）

佐々木康之

（静岡大学大学院農学研究科修士2年）

小西潤子

（静岡大学教育学部准教授）

新井和康

（静岡大学大学院教育学研究科修士1年）

藤井基貴

（静岡大学教育学部准教授）

宮田舞

（静岡大学教育学部4年）

鄭眞永

（静岡大学大学院人文社会科学研究科修士2年）

鈴木瑞

（静岡大学大学院人文社会科学研究科修士2年）

林のぶ

（静岡大学教育学部同窓会）

伊藤允彦

（静岡大学大学院農学研究科修士1年）

■コーディネーター

満井義政

（静岡大学地域連携協働センター長）

■主催

静岡大学地域連携協働センター・生涯学習教育研究センター

01 主催者挨拶

静岡大学地域連携協働センター長 満井義政

04 基調報告

結[YUI]～現代GP 芸術工房ネットワークの活動

東北芸術工科大学芸術学部教授、こども芸術教育研究センター長 片桐隆嗣

16 事例報告 1

現代GP 一社一村しずおか運動における学生の役割

静岡大学創造科学技術大学院准教授 竹之内裕文

静岡大学大学院農学研究科修士2年 佐々木康之

20 事例報告 2

音楽活動を通じた地域連携の取り組み

静岡大学教育学部准教授 小西潤子

静岡大学大学院教育学研究科修士1年 新井和康

24 事例報告 3

リベラルアーツカフェの挑戦

静岡大学教育学部准教授 藤井基貴

静岡大学教育学部4年 宮田舞

28 事例報告 4

空港開港に伴う静岡市のホテル旅館の国際化対応と留学生の貢献

静岡大学大学院人文社会科学研究科修士2年 鄭真永

静岡大学大学院人文社会科学研究科修士2年 鈴木瑞

30 事例報告 5

地域と大学を結ぶ、天晴れ門前塾の取り組み

静岡大学教育学部同窓会 林のぶ

34 事例報告 6

創立60周年記念公開シンポジウムの企画・実施を通じて

静岡大学大学院農学研究科修士1年 伊藤允彦

38 パネルディスカッション

主催者挨拶

< 静岡大学地域連携協働センター長 満井義政 >



静岡大学地域連携協働センターは、地域との活動をどう大学の教育研究に生かしていくか、また地域からどう学びとるか、実践を将来の学生たちにどのように生かしていくか、という大きなテーマのもとに発足した組織です。これまでも長い間にわたり、地域の企業、あるいは地域のみなさんとの活動は様々な形で行われてきましたが、これらを大学の窓口の組織として、そこから情報を発信していくということを目的にセンターは動き出したところです。

今回は地域との関わりを持った活動の中で学生が主体となって動いているものをご紹介しながら、その活動について皆さんと情報交換をし、大学の教育活動をさらに掘り起こしていき、研究の素材、あるいは教育の参考にさせていただきたいと考えております。

このシンポジウムでは、基調報告と6つの事例報告の全部で7つの報告をさせていただきます。たくさんの資料がございますが、それらをご確認の上、報告をお聞きください。ご質問などがあれば、会場の方からもぜひ声をかけていただければと思います。

基調報告

結 [YUI] ～現代 GP 芸術工房ネットワークの活動

片桐隆嗣

(東北芸術工科大学芸術学部教授、こども芸術教育研究センター長)

現代 GP 芸術工房ネットワークの概要

今日は、現代 GP 芸術工房ネットワークの中の、天童市の田麦野地区での学生たちの活動をご報告したいと思っております。

東北芸術工科大学は公設民営方式の大学で、1993年4月に開学しました。東北の以北にある唯一の四年制の芸術大学です。東北文化研究センターを持ち、デザインと美術とを、民俗学、考古学、歴史学などで結んでいこうというという構想を持っています。一学年500人で、芸術学部とデザイン工学部の2学部8学科からなっています(芸術学部：美術史・文化財保存修復学科／美術科／歴史遺産学科、デザイン工学部：プロダクトデザイン学科／グラフィックデザイン学科／建築・環境デザイン学科／映像学科／企画構想学科)。

本日の報告は、2006年度から2008年度にかけて文部科学省から現代GPに採用された芸術工房ネットワークの活動についてです。なかでも、山形県天童市の田麦野地区、現在は交流施設「ぼんぼこ」という名称で使用されている旧田麦野小学校を拠点として行われている「みつけたむぎの」という活動をご紹介します。

この芸術工房ネットワークでは、廃校を舞台に、「芸術」「自然」「地域」をテーマとして交流学習を展開してきました。私はそのなかの三つのプロジェクトに関わってきました。

地域社会をフィールドにした 3つのプロジェクト

芸術工房ネットワークの活動は、二つの柱からなります。一つは地域社会をフィールドにした新しい教育



カリキュラムの探求を行う試み。それから、もう一つは、廃校を地域住民にとっての新たな文化交流と学びの拠点にするという試みです。こういった学生と地域の方々の両方へのメリットを求めて、廃校同士、また廃校と大学とをネットワーク化しようとした活動を「芸術工房ネットワーク」と呼んでいます。そこで生みだされる、新しい人間関係、これは民俗学の用語ですが、それを結[YUI]と名付け、それが大きなタイトルになっております。

私自身は、大江町というところにある七軒西という小学校で15年前から、学生たちや地区の子どもたちを対象に自然造形教室を実施していて、そこの方々と交流する機会として現代GPに参加しました。

それから、私はこども芸術教育研究センターのセンター長として、芸術を子どもの教育にどう生かしていけるだろうか、という視点から、新しい大学院を立ち上げました。その領域の学生が開発したワークショップを実践する場として廃校に注目し、廃校にもう子どもはいないのですが、お年寄り、高齢者の方々にワークショップを実践していくプロジェクトとして、芸術工房ネットワークに参加しました。

三つめが、今日ご報告させていただく「みつけたむぎの」の活動です。以上、三つのプロジェクトに関わっ

ています。

それでは、田麦野地区での活動の報告に入ります。この活動は、天童市田麦野地区田麦野小学校を拠点としています。この施設は廃校になってから6カ月後に、田麦野公民館を併設した交流施設「ぼんぼこ」として再生されました。ですから今は純粋な廃校ではありません。現在、公民館と交流施設が併合されているということで、公民館のスタッフを含めると3人がそこに常駐しており、貸し館事業、自主講座などを展開しています。地元出身の女性職員の方が、地域の方々と学生との間のメディアイター、要はつなぎ役になって下さっています。

自主講座の内容をご覧になっていただくとわかるのですが、かなり地域の資源を生かした内容豊かな講座になっています(図1)。これは3年前に「ぼんぼこ」という交流施設ができ、その3年前から始まったものです。こういった自主講座をやる力をもったスタッフがいるということが重要です。

自主講座「ぼんぼこ塾」 →地域資源を活用した内容豊かな講座	
第1回	「開校式及び田植え体験」
第2回	「竹の子採り体験」
第3回	「笹巻きづくりと虫観賞」
第4回	「留山ダム見学とつる採り」
第5回	「稲刈り体験」
第6回	「きのこ狩り体験」
第7回	「森づくり体験と新米を食べよう」
第8回	「クリスマスリースづくりと佃煮作り」
第9回	「小正月だんごさしとかごづくり」
第10回	「かんじきを履いて雪原をトレッキング」
第11回	「スリッパ卓球参加とAED講習会」
第12回	「きのこの植菌及びじゃがいも植え」

(図1) 自主講座一覧

自主的に活動するチュートリアル

次に、送り出す大学側ですが、チュートリアルという活動を行っています。「共通の関心や興味を持つ教職員と学生が、学部学科に関係なく授業を離れて自由な立場で集い、ひとつのテーマを研究していくという参加型の活動」、これを我々はチュートリアルと呼んでいます。学生は単位になりませんし、先生方もこれをやったからといって給料が上がるわけでもない。本当に純粋に、自発的、自主的に学生と教員が、課外や時間外に教育研究活動をやっているというものです。自発性が基本なので、学生の動機、モチベーショ

ンがかなり高いということになります。また教員との共同活動という形をとりますので、活動の質やレベルがかなり高くなります。

それから学科コース学年を超えての交流ができます。2学部8学科から、まんべんなく学生が参加しています。チュートリアルは自主参加なので、一年やってみて、それで抜けていく子や、あるいは二年やってみて抜けていく子もいます。ある一時点で区切ってみると、これだけの学生が、いろんな学科からやってきて、活動しているという形になります。

学生たちが自ら考えたコンセプト

芸術工房ネットワーク全体で見ますと、初年度は、授業、ゼミ、サークル、チュートリアルなど、5市町村8つの廃校を使用した30以上のプロジェクトが立ち上がりました。

しかしながら、最終年度になりますと5市町村12のプロジェクトに終息していく。終息していくということは、他はなくなっていったということなんです。12のうち残った9つがチュートリアルを主体にしたものでした。このチュートリアル系がなぜ残ったのかというと、ひとつ大きな課題というか話題になるのですが、今日はそういうことには入らずに進めたいと思います。

それから「みつけたむぎの」の活動では、教育委員会の支援があって、たとえば先ほどの「ぼんぼこ」の使用にあたって、さまざまな配慮をして下さったりしています。あるいは来年度には、財政的な支援をいただけるようになるかもしれません。

また、大学側も、現代GPあるいは、その後継事業として財政的支援をしてはいるのですが、中長期的には自分たちでお金を取れるように活動してくださいという要望があるようです。

さらに、地区の方々との関係では、地域作り委員会という組織があり、そこの連携を強くしてきています。

こういった形で進められているのが「みつけたむぎの」という活動です。次に、その活動の風景を映像で見てください。

こういった棚田が広がっている農村地帯で、85世帯344人の集落です(図2・図3)。

これが拠点となっている旧田麦野小学校「ぼんぼこ」です(図4)。

3年間にわたって活動をしてきているのですが、学生がそのコンセプトを設定しました。「逢色プロジェクト」と呼んでいます。「逢いは遭いより出でて会いよりも深し」というのがその内容で、活動を通して学生と地域の人々が偶然遭う。その出遭った人同士の個性が交わることで、出会いが生まれ、より深い個性が生まれる、その結果、離れていてもまた会いたい、お互い思い合える関係（出逢い）になっていく。こうしたコンセプトのもとで学生たちが活動しています。なお、これは学生たちが考えたものです。

くまなく歩いてフィールドを広げる作業

活動は取材、散策が中心です。きれいな風景が気に入ったとか、あるいは、地域の方々と交流したい、学生はそういう思いで入っていますので、こういう形になっていきます（図5～図8）。出会ったおばあちゃんの家にあげてもらったり、道端でおばあちゃんたちとお話をする。この（図9）おばあちゃんはいつも学生たちを逆に待っていてくれて、道端で必ずお話をしてくれます。

学生の地域への入り方が非常に特徴的です。自分たちが取材したり、散策で入った時に地域の方々を驚かせたくないという思いを学生は持っています。最近では、こういう地域にも不審者や、あくどい商売をやっている若者が入ってくることがあるので、そういう警戒をされるのは避けたい。そこで地域の方に自分たちのことを紹介する似顔絵入りのチラシを回覧板で回したり、また大きな活動をする時には必ずチラシを作って回覧板で回したり、チラシをつくり学生が一軒一軒のお宅に手渡したりするなどの活動をしています（図10）。85世帯ですから、大体4人で行けば20世帯ぐらいを2時間ぐらいで回れるわけです。

それから、当初は、東北芸術工科大学の学生と分かる手ぬぐいを作って、それを身にまとい目につく形で取材するということもしました（図11）。

あと、学生たちは、自分たちで地図を作り、活動の成果を目に見える形にするということもやっています（図12）。この地図を作るというのは、他のプロジェクトでも結構よく見られる活動です。それぞれが見たもの、聞いたもの、感じたもの、考えたことを、こうやって地図に書き込み、それをみんなで共有し合おうという意図がそこにはあります。



（図2）田麦野地区は、周囲を緩やかな山に囲まれた棚田の美しい集落



（図3）天童市にある田麦野地区を拠点として活動を行っている



（図4）3年前に廃校になった小学校を天童市高原の里交流施設「ほんぼこ」として利用している



(図5) 写真などを撮影して記録



(図8) 空家でスケッチする学生



(図6) 「一服してけー」と誘われ、おばあさんの家に上がらせてもらう学生も



(図9) 散策中のミーティング



(図7) 取材と散策の様子



(図10) 一軒ずつお宅を回り、チラシを手渡しする



(図 11) 芸大学の学生とわかるように、揃いの手ぬぐいを作る



(図 12) 地域の危ない場所や、散りを把握しておくため手作りの地図を作り、それを持って取材を行った

活動から生まれた地域ぐるみの展示会

こういう散策を続けるなかから、自分たちの作品を地域の方々に展示して見てもらいたい、ということを学生たちが思うようになりました (図 13～15)。

廃校の場合は、会場全体を展示空間にすることになります。この作品 (図 16) なんかはすごく評判が良くて、展示が終わった後も、常設という形で作品が残されていたケースです。この作品の場合、よそから来た公民館の方が気にいって、「うちにも飾ってくれ」



(図 13) 取材で出会った人々と再会し、作品を通してのより深い交流を目指し「初画展」を開催



(図 14) 展示会の会場



(図 15) 作品の展示風景

というような形で、こんなふうに展示作品が他のところでも活用された事例です (図 17)。

展示会では、ただ飾るだけではなく、履物や生活に使うものを作った学生もいました (図 18)。展示会に来られなかった人のために図録を制作して配布する、ということもしました (図 22)。

1年目は、大学院生が地区の空き家をお借りして、2週間の滞在制作をしました。滞在制作をすることによって、地域の方々との距離がずっと近くなりましたし、また、地域の方々から信頼を得る効果があったように思います (図 23～図 25)。その結果、こういう形で、また公民館や「ぼんぼこ」の方で展示をすることになりました (図 26)。



(図 16) 階段を利用した展示

これが2年目です。2年目はただ展示や散策をするだけではなく、いろいろな行事に参加することになりました。また、「ぼんぼこ塾」の事業にも積極的に参加をしました。二度目の展示は1年目とは異なり、ただ平面の作品を作って飾るのではなくて、手作りパンを作ったり、オリジナル太巻きを作って、地域の人と一緒に食べながら交流することを目的にした学生もいました。また、自分の作品を展示するだけでなく、田麦野地区の人々の作品をお借りして、共同で展示する、という視点も出てきました。美術観や作品観の変化と言ってもよいかと思います (図 27～図 40)。



(図 17) 天井などのスペースも有効に使った



(図 18) 会場では履物を制作した学生も



(図 19) ゲームデザインの学生は「たむぎのすごろく」を作成



(図 23) 竹の空家を借りて週間の滞在



(図 20) おばあさん 1 人のために作品を作った学生も。今もおばあさんの家に作品が置いてある



(図 24) 学校に滞在し制作をしながら、地域の方と交流



(図 21) 最終日には一年間のお礼の気持ちをこめて餅つき交流会を開催



(図 25) 作品作りの様子



(図 22) 展示会に来られなかった人々のために、図録を作成し配布



(図 26) 大きな作品も学校なら制作・展示しやすい

2007年度の活動記録

大学院生2名による、滞在、公開制作、展示会
4年生による展示会
「みつけたむぎの」メンバーによる取材活動と展示会

- 7月1日 取材・散策
(7月18—30日) アーティスト・イン・レジデンス (大学院生)
- 9月22・23日 合宿
- 12月2—9日 展示会「みつけたむぎの初画展」
- 3月10日 「みつけたむぎの図録配り」

(図 27)



(図 30) ほんぼこが主催する自然体験講座「ほんぼこ塾」への参加

2008年度の活動記録

- 6月8日 新入生体験会
- 7月6日 取材・散策
- 8月31日 取材・散策
- 9月6・7日 合宿・そうめん大会
(10月5—13日 展示会「日常×日常 たむぎの日記展」大学院生の展示会)
- 10月13日 取材・散策
- 11月1・2日 合宿
- 11月26—23日 展示会「みつけたむぎの 道の駅」
- 12月14日 展覧会「みつけたむぎの 道の駅」お礼状配り
- 2月28日 キャンドルナイト「冬のありが灯」
- 3月20日 展覧会「みつけたむぎの 道の駅」図録配り
(3月 卒業生による展示会)
- *週1回のミーティング
- *個人：「ほんぼこ塾」、「そば祭り」「雪祭り」などの地域行事、取材・散策
- *1月から3月にかけて「田麦野地区看板制作」(有志)

(図 28)



(図 31) 2年目から地域の年間行事やレクリエーションにも積極的に参加するようになり、交流を深めた

2009年度の活動記録

- 6月7日 取材・散策
- 6月21日 取材・散策
- 8月23・24日 合宿・キャンドルナイト「みつけたむぎの ありが灯」
- 9月27日—10月12日 展示会「秋の四草展」(有志による展覧会)
- 10月24・25日 合宿(下級生主体に)
- 11月3日—11月21日 展示会「お茶の間展示会」(滞在制作の学生による展示会)
- 11月17日 勉強会『『田麦野今昔』を語る一東海林昭典先生が見つめた田麦野の自然、人々の暮らし』
- 11月29日 取材・合宿(下級生主体に)
- 2月10日 卒業修了展への招待
- 2月
- *週1回のミーティング
- *個人で「ほんぼこ塾」、「そば祭り」「雪祭り」などの地域行事、取材・散策

(図 29)



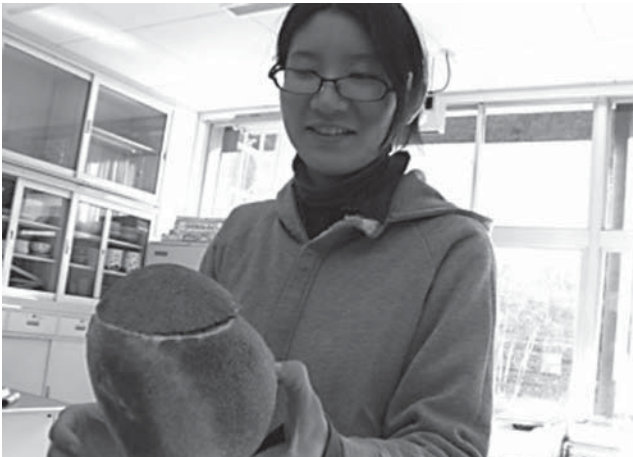
(図 32) レクリエーション大会の後には、学生が食事会を開き、そうめんを食べながら田麦野の方とゆっくり話せる場を作った



(図 33) 田麦野に生えている竹を使ってお椀を作ったり、道ばたに生えている草花で食卓を彩ったり。「身近にある草花の見方が変わるよ」という田麦野の方。休日に田麦野を訪れる学生も出てきた



(図 34) この一年を通して感じたものを田麦野で形にしたい、人が集まれる場所を作りたいという思いから「よってけらっしい みてけらっしい みつけたむぎの 道の駅」を開催



(図 35) 田麦野で見つけた植物で酵母菌をつくり手作りパンを作った学生



(図 36) 田麦野をイメージしたオリジナル太巻きを作った学生



(図 37) みんなが自由に書きこめる巨大な地図を設置。昔の田麦野のこと、見つけたものなどがどんどん書きこまれた



(図 38) 田麦野の人々の作品をお借りしての展示



(図 39) 会場まで来られない方にも楽しんでいただくため、学校を飛び出してリヤカーの屋台をひっぱった。あたたかい玉こんにゃくが振舞われ大人気



(図 40) 2年間の活動の歩みまとめた報告書を作り田麦野の方々に配った

普段話すことのできない住民と交流

公民館とか学校というところに入り出している人は、その地域の顔役であったり、世話役的な人だったりすることが多く、また、健康な人がほとんどです。でも多くの人は、公民館や学校になかなか足を運んでいない。敷居が高いという意識をもつ人々、あるいは体が不自由なおじいちゃん、おばあちゃんも少なくない。そのような人々は学校や公民館まで歩いて行くのは大変だ。そのようなことを学生たちは気づき始めます。そうであれば、作品をもって廃校を飛び出して行こう。そうした考え方も生まれました。図録を一軒一軒配っていくようになったのも、そうした理由からです。

これが今年度の活動です。さらに活動は多様化していきます。

1カ月、学校に泊り込んで作品を制作し、それを展示する学生や、『田麦野今昔』という10年前に作られた民俗誌を書いた方々を呼んで勉強会を開く学生など、いろんな活動が生まれてきました。

地図看板を作るという、学生と田麦野の人との共同制作活動も行われました(図41)。また、これは「夏のキャンドルナイト」という形で、地域の方と学生がキャンドルナイト700個を作り、4ヶ所の地区で展示を行った時の風景です(図42～図44)。こういう交流の拠点を作り、学生たちがお餅を作って、そこで集まった人たちにふるまうなど、一晩のたった2時間ぐらいですけど、楽しい時間を過ごしました。

1カ月間、学校に寝泊まりして滞在した学生は、「お茶の間展示会」というタイトルで、ここで作った作品を7軒、8軒のお宅に展示をさせていただき、地域の方々の交流を作り出そうとしました(図45)。農協や郵便局にも飾ってもらっていました(図46・図47)。

活動の基本は週1回のミーティングと、月1回の現地での活動、年1回の展示が基本です。しかしながら、時間の経過とともに、個人での取材活動や、地域の行事への参加、あるいは行事を主催するという形で、どんどん活動が広がっていきました。

また、当初の交流対象は、ぼんぼこ関係者、地域の顔役、面倒見のいいおじいちゃん、おばあちゃんとの出会いです。先ほど申し上げたように、学校・公民館という場所の特殊性、地域に住む人々の実情が見えてくることによって、普段話すことのできない住民と交流したいという気持ちや、「ぼんぼこ」に来ることができない住民に作品を見てもらいたいという形での



(図41) 4年生が田麦野地区の地域づくり委員会の方々と共同で田麦野の地図を制作



(図42) 冬のキャンドルナイトに引き続き、夏のキャンドルナイトも行った



(図43) キャンドルナイトは地区4カ所で実施



(図44) 田麦野の人とゆっくり話したいという思いから、季節を冬から夏に移し、夕涼みができる場所を設けた

活動が生まれて、一部の住民から住民全体へと交流対象が拡大していったという3年間です。そういう中で、学生たちは一体どんな「学び」を得たのでしょうか。



(図45) 滞在制作での成果をお茶の間に飾ってもらう「お茶の間展」を開催



(図46) 農協に作品を展示



(図47) 郵便局でも作品を展示

活動を通じて得たさまざまなこと

一つには、学生が人間関係と交流の積み方を学ぶ機会となりました。時間をかけてゆっくりと、想いを持って、丁寧に、人間関係を取り結んでいくことの大切さを知ることになりました。さきほど見ていただいた映像でも分かるように、彼らはかなり慎重に地域に入っていました。

それから、豊かさや生き方を考える機会になりました。私は芸大生のキャリア教育だと言っているのですが、芸大生の夢というのは、できれば将来にわたって、ずっと制作を続けていきたい、そのためにはどのように生活していけばよいのか、これが常に課題となるわけです。

地域、とりわけ過疎地域での住民との出会いというのは、経済的な価値や便利さに代わるオルタナティブな価値があることを学ぶ機会になる、僕はそう考えています。自然の時間やリズムに合わせて自分らしく生きている人、あるいは、命を育み、その環境の中で生き生きと生きている人、そこに、もうひとつの豊かさがあるのだということに学生たちは気づいていきます。

三つ目は、美術観を揺さぶられる機会となります。どうしても芸大の学生は、アトリエを中心とした美術観、つまり、美術とは自己表現である、あるいは、見せるに値する作品がすべてである、という考え方に固執しています。

しかしながら、地域での活動を通して、美術の特殊性が見えてくるのです。地域の人たちにとってみれば、「美術はわからない」「難しい」「苦手だ」「関係のないもの」です。そういう人々にどうやって美術を通して交流することができるかと学生は考えさせられる。そうすると、たとえば見せることがすべてではない、というふうな考え、パンや太巻きを制作した学生のような活動も生まれてくるわけです。行為そのものに、アートを生かすという点では、現代アートへの発想ともつながっていきます。

自己表現だけが芸術ではない。さきほどお見せした、自由に書き込める巨大地図の制作、風景がそれにあたります。地域の人々の作品の展示も、それにあたります。また、みんなで展示する、みんなで作り上げることも表現活動だ、というコミュニティ・アートの発想へとつながっていきます。アトリエでない場所で、アートの概念を広げていく、地域がそういう場になっているのです。

一方、学生による地域への貢献という面では、学生が作品を通して、住民の方が自分の住む土地の魅力に気づく、という利点もあります。また今回のような学生の活動を通して「田麦野」が情報として市内外に広がるということも利点です。展示会に来てくれた方が田麦野の良さを話してくれて、それを聞いた他の人が訪れてくれる、という広がりです。

それから、学生が地域の間人関係を取りもつようになったということも良い面です。特に田麦野の場合は、とても閉鎖的な場所だったらしいのですが、学生が地域に入ることによって、外の人間を受け入れるというような光景も生まれてきたと聞いています。

見えてきた問題点と解決策

チュートリアル活動というのは、授業ではありません。経済的に厳しい学生の場合は、アルバイトに時間を費やさなければならず、参加することができません。不況という社会背景もあって、学生を確保するのが厳しくなっています。

田麦野は、新幹線の駅から20分のところにある廃校なので、まだ便が良い方なのですが、それでも、バスが平日に1本しかなかったり、土日はバスがまったくない、という状況になります。これはとても大きな問題です。交通手段をどう確保するかという問題です。学生同士の車の乗合の場合、事故が起きたらどうするんだ、という問題もありますし、車がない学生もたくさんいますので、交通手段の確保はかなり厳しくなっています。メンバーが増える来年度に向けて、地区の方に駅までの送り迎えをお願いする、という形を考えてきたのですが、これも事故があった場合にどうなんだということで、天童市の職員の方が駅までの送り迎えをして下さるということに落ち着きそうです。それでも、参加者が10人を超える場合には、手の打ちようがありません。

プロジェクト全体の話で言いますと、教員の異動が早くなってきている問題もあります。特に私のところは私立大学なので、学科やコースの再編が結構あります。任期制の先生も多く、5年も経つと先生がいなくなる。せっかくここまで紡いできたものが、先生がいなくなると同時にやはりどうしても下火になる。そういう問題があります。

そこで「みつけたむぎの」では、卒業生との連携を図りたいと考えています。というのも、新たに参加し

てくる学生の数は、どうしても予測不可能なところがあります。10人入る年もあれば、1人、2人の年もある。それゆえ、すでに関係ができている卒業生との連携を深めていこうと考えています。ホームページを作成し、そこで情報交換をする。卒業生から作品を送ってもらって、それを「ぼんぼこ」で展示する。職員の方が展示を容易にできるように施設を改善しました。

また田麦野という所は、非常に豊かな食文化があるので、そこを研究して外に発信しようといった展望も持っています。先に述べた民俗誌『田麦野今昔』は10年前に作られたのですが、その現代版を作って発行してみたらどうだろうか、という活動も進めてきています。

これからの展望とプロジェクトにかける思い

最後になりますが、「みつけたむぎの」の活動というのは、「機能的」ではありません。ある意味、役に立たないと見えることがかなりあります。

「仲良くなりたい」というより、「ともにありたい」。つまり田麦野の自然、田麦野の人、田麦野の生活とともにありたい、というのが学生への願いなんです。ですが、「何のために」、また「それだけでいいの?」という問いが常につきまわってきます。つまり、地域作りや地域の活性化という視点がほとんど入っていないということです。ここのところは強調したいと思います。

地域活性型のアートプロジェクトが全国津々浦々で展開されていますが、それらにまつわる課題も見えてきています。アーティストが中に入って、地域を活性化し、地域の人たちが地域づくりに目覚めていく。そこまでは来た。しかしながら、「それをどうやって継続させていくのか」。また、「その継続の先にあるものは何か」というところで、いろんなアートプロジェクトが壁にぶち当たっている。そういった時に、この「ともにある」だけでいい、という考え方を「みつけたむぎの」の活動が、今後どういう進化をとげていくのか。あるいは学生が地域にどんな影響をもたらすのか。そのことをしっかりと見ていきたい。そのように考えています。ご静聴ありがとうございました。

事例報告1

現代 GP 一社一村しずおか運動における学生の役割

佐々木康之

(静岡大学大学院農学研究科修士2年)

竹之内裕文

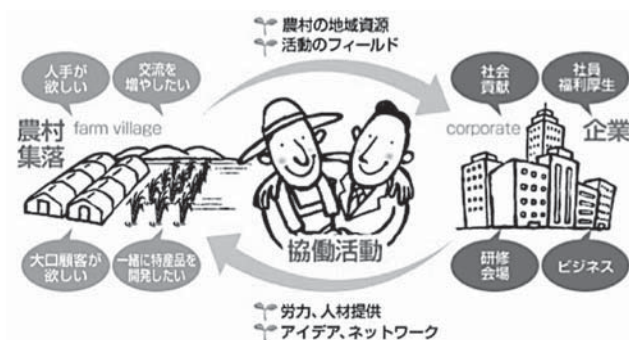
(静岡大学創造科学技術大学院准教授)

地域と大学が連携する

「一社一村しずおか運動」の概要

静岡大学農学部では、学生が農村地域に実際に行って農村体験をするという実習が3年前から始まりまして、その取り組みが現代 GP にも選定されました。今日はその取り組みが地域と学生にどのような変化をもたらしたのか、またその中で見えてきた学生の役割について発表させていただきます。

まず地域と大学が、どうやって連携をするに至ったかと言いますと、静岡県が主体となって展開している「一社一村しずおか運動」(図1)という取り組みがあり、それがきっかけとなりました。



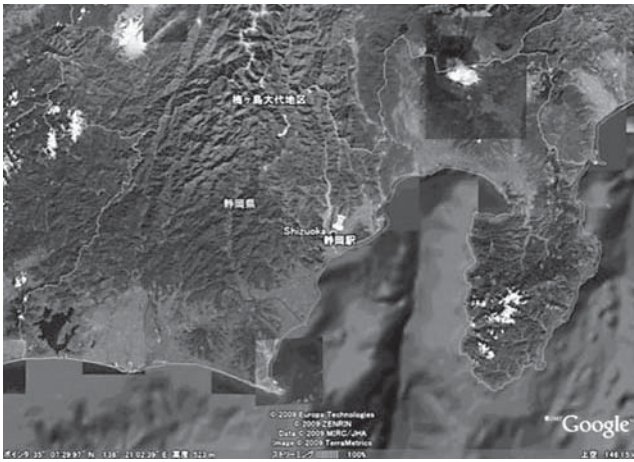
(図1) 一社一村しずおか運動における協働

まず一社一村運動について簡単に説明します。一社一村運動というのは、疲弊する農村地域、農村集落を維持発展させていくために、企業の力を活用していきこうという運動なのですが、一方的な援助という形ではなく、それぞれのニーズを結びつけ、お互いに利益がある関係を築き、活動を行っていくというかたちをと



ります。3年前に一社一村の「一社」の方に静岡大学農学部が、「一村」の方に静岡市葵区梅ヶ島大代地区が名乗りを挙げました。そして大代地区からは教育のためのフィールドを提供する、大学の方からは若い学生の労働力を提供するという関係が結ばれました。大学はこの取り組みを、単位が修得できる正規の授業として開講しています。その取り組みが、SBSでも何度か放送されました。

梅ヶ島大代地区は、安倍川の上流、市街地から車で1時間半ほどの場所にあります(図2・図3)。標高700mから800mの中山間地域で、11世帯40人ほどの方が暮らしています。主な生業はお茶の栽培で、シイタケやワサビなども栽培しています。過疎化と高齢化が進み、後継者不足に悩んでいる地域です。



(図2) 大代地区の場所



(図3) 大代地区の景観

1年目は「体験フェーズ」と言い、農村体験を目的にしています。2年目は「課題探求フェーズ」で、それぞれが自分の切り口で地区の具体的な課題を発見します。そして3年目の「環境リーダー養成フェーズ」で、各自の課題について解決策を提案します。

「環境リーダー」というのは、学生の3年間の活動を大学、行政、地区の方などが評価し、農村や農業の問題の解決に向けて取り組んでいく素養があると判断されると、大学から授与される称号です。ちょうど今日の午前中に、もくせい会館で環境リーダーの認定式がありました。実習の履修者人数は3学年で74人で、今年度の環境リーダー養成フェーズの学生の課題は次のとおりです(図5)。

環境リーダー養成フェーズの学生(3年生)の課題一覧

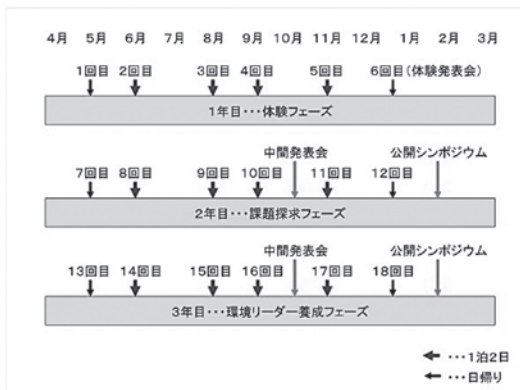
氏名	課題
友松 ゆい	大代フリーペーパーの制作
糟屋 志保美	大代フリーペーパーの制作
阿久津 千秋	大代フリーペーパーの制作
高橋 冬実	梅ヶ島・梅ヶ島茶についての意識調査
井澤 祐樹	梅ヶ島・梅ヶ島茶についての意識調査
國弘 彩	(梅ヶ島・梅ヶ島茶についての意識調査&)リーフレット作成による認知度の上昇
鈴木 綾乃	地区住民と学生の交流会
犬塚 友貴	地区住民と学生の交流会
中西 勇介	地区住民と学生の交流会
荒川 裕史	地区住民と学生の交流会
馬場 崇彰	ホームカミングデイ開催に向けて
喜田 恭子	3年間の活動報告
成岡 孝史	大代地区水源への道整備活動

(図5) 環境リーダー養成フェーズの学生と課題一覧

環境リーダー養成フェーズでの実習

次に実習の内容について簡単に説明します。授業枠としては3年間のプログラムで、年6回の訪問があり、内4回は一泊二日で実習を行います(図4)。

農業環境教育プロジェクト

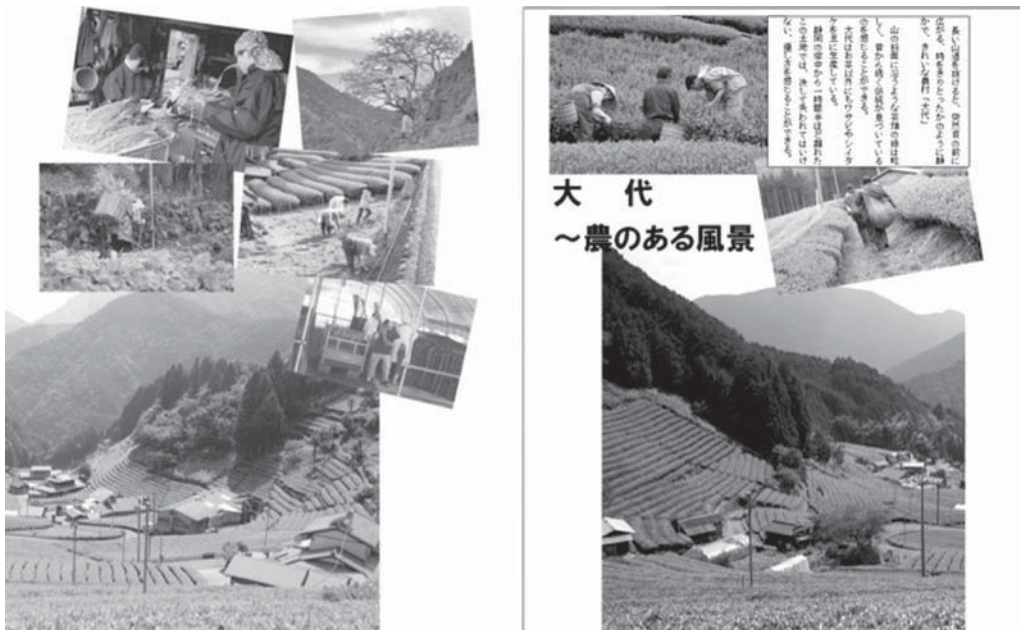


(図4) 農業環境プロジェクトのスケジュール

学生ならではの発想で発行するフリーペーパー

ご覧のとおり、大代地区の魅力伝えるフリーペーパーや、梅ヶ島、梅ヶ島のお茶についての意識調査などの課題が見られます。これがそのフリーペーパーの一部なのですが、簡単な説明を加えたいと思います(図6)。

農村関係のフリーペーパーとしては、すでに「すろーらいふ」などがありますが、内容は店の紹介などの商業に結びついた記事が中心となっています。それに対して、学生たちが作成したフリーペーパーは、なんでもない農村の生活をそのまま伝えたいという、学生ならではの金銭や利害が絡まない発想から生まれました。きれいな農村風景の写真が載っており、田舎料理の紹介もあり、僕もインタビューされて記事になりました。まだ完成版ではないですが、20部ほど持っているので良かったら声をかけて下さい。お分けします。



(図 6) 大代地区の魅力伝えるフリーペーパーを発行

大学と地域から寄せられる期待

学生に対する大学からの期待ですが、実際に農作業を手伝い、地区の方々との交流を持ちながら、農村についてのさまざまなことを感じ学び、そのなかで地区の課題や問題を見出し、解決策を提案してほしい、また、その活動を通して様々な問題を広い視野でとらえることのできる人間になってほしいということだと理解しています。

地域からの期待としては、農繁期の労働力にとどまらず、柔軟な発想と行動力による、地域の問題の解決があります。「3年間、農村で経験したことを忘れずにいてほしい」「できれば将来何の職業に就いても、その経験を生かしてほしい」「農業、あるいは、日本の先行きが見通せない現状の中で、世の中を変えていけるような人間になってほしい」など、当初想定していなかった、とても大きな期待が地区の方々から寄せられています。

当初は「実際に農作業を手伝い、労働力となる」ことや、「地区の課題や問題点を見出し、解決策を提案する」「収入の増加や生活環境の改善」などを想定して活動を始めたのですが、今では、その枠を越えて、大代の人々のなまの生活に触れ、疲弊した農村の現状を知ってほしい、農業や農村についてともに考え生きてほしい、という思いが芽生えています。

他方、学生の方では、農村生活に触れて生きる手ごかりを得たい、自然と人間の持続的な関わりについて学びたいといったように、単なる共同作業にとどまら

ない動機が見られるようになってきていると感じています。

この活動を通して見えてきた学生の役割は、まず、「よそもの」の視点から、地域の資源と魅力を掘り起こし、それによって地域の誇りを回復する、つまり地域の魅力を土地の人たちに気付かせるという役割があると思います。さらに、地域の住民だけでは実現困難な新たな活動のけん引やサポート、そして柔軟な発想や専門的な知識による地域の問題の解決という役割があると思います。

今後の活動について

今後の展望ですが、農繁期の労働力としては、十分期待に応えられていると感じます。

また、地域の問題解決については容易ではないため、目立った成果はまだ残せていませんが、解決にむけて着実に一步一步、進んでいる印象です。下級生のさらなる頑張りに期待しています。

今後の課題としては、他学部との連携が挙げられます。実社会の問題には広い分野にまたがる多種の課題が少なくありません。農学部単独では、専門的な知識という大学の強みを生かせる部分が限られてきます。そこで他学部の学生や教員も巻き込んだ取り組みとして拡充していくと、新たな可能性が開けるのではないかと考えています。以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。



大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。

「大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。」
「大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。」

「大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。」
「大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。」



お惣菜入れる時に、汁ごとにお湯も入れるおまんこ。その
ほかで魚卵の尻尾もするおまんこ。心算で出来です。



こんにゃくの白粉えき持物の惣菜おまんこ。その
ほかで魚卵の尻尾もするおまんこ。心算で出来です。



たくさん お食べ

「大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。」
「大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。」



お惣菜入れる時に、汁ごとにお湯も入れるおまんこ。その
ほかで魚卵の尻尾もするおまんこ。心算で出来です。

「大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。」
「大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。」

「大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。」
「大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。」

「大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。」
「大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。」



お惣菜入れる時に、汁ごとにお湯も入れるおまんこ。その
ほかで魚卵の尻尾もするおまんこ。心算で出来です。

「大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。」
「大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。」

あの人から見た農村風景

「大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。」
「大げやまい大ききまに切ったおたまほこに切
れ煎も入れ、そこにも揚げ海苔も入ると
いうシンプアな一品。」



お惣菜入れる時に、汁ごとにお湯も入れるおまんこ。その
ほかで魚卵の尻尾もするおまんこ。心算で出来です。

(図6) フリーペーパーの紙面

事例報告2

音楽活動を通じた地域連携の取り組み

小西潤子

(静岡大学教育学部准教授)

新井和康

(静岡大学大学院教育学研究科修士1年)

主な音楽活動

私どものテーマ「音楽活動を通じた地域連携の取り組み」に関する主な活動は、アウトリーチ研究会、スウェーデンとの音楽交流(2008.7)をはじめ、インドネシア・バリ島のガムラン演奏が含まれます。ガムラン演奏では、キャンパスミュージアム特別展(2008.11)、静大フェスタ(2009.5)、第24回国民文化祭(2009.11)に出演しており、来年度は大学婦人協会総会(2010.5)においても出演予定です。

以上の活動の一部については、お手元の配布資料『学びに熱中する子供の育成プログラム』でも紹介しております。また、お配りしましたもののうち演奏会当日配布の解説書などについては、そのデザインやプログラム作りに学生が関わったものがあります。本日は、その中から国民文化祭へ参加したガムラン演奏団のことを中心にご紹介したいと思います。



(図1)「海野文科フェスティバル」での様子。海に関する民族関係資料や楽器の展示



はばたく静岡国民文化祭

みなさんご存じかもしれませんが、国民文化祭は1977年から毎年、各都道府県で開催されている日本の文化の祭典です。今回は静岡県で開催されたということで、県内36市町村で、演劇、吹奏楽、美術展など108のイベントが開催されました。その中で我々が参加したのは、焼津市主催事業の海の文化フェスティバルの一環で、焼津市文化センターの小ホールで2009年10月31日から11月8日まで行われた「海のおもしろ民族学展」という民族学展です。その内容は、海に関する民族関係資料や楽器の展示(図1)、民族楽器の演奏ということで、この民族楽器の演奏というカテゴリーの中に参加させていただきました。実際に民族学展の展示物のうちのひとつとして、静岡大学に

あるガムランを展示させてもらい、演奏の方は11月1日に2度、演奏会に合わせてワークショップも開きました。ここでは来場していただいた方に直接学生が隣について楽器を教えて、簡単な曲を一曲、みんなで演奏してみましょう、という内容でした。小さい会場だったのですが、演奏会では各50名ほど集まり、ワークショップの方も大人から子どもまでみなさん積極的に参加して下さいました(図2・図3)。



(図2) 静岡大学ガムラン演奏団のワークショップ

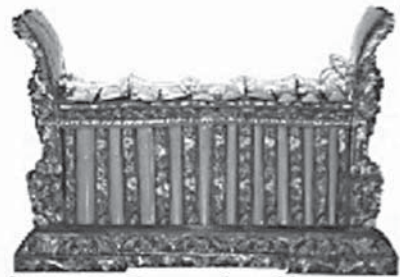


(図3) 実際にガムランを演奏したコンサート

ガムランとは?

ガムランというのは、インドネシアに存在する音楽および楽器群の名称です(図4・図5)。楽器の名前でもあり、そのガムランで奏でる音楽もガムランと呼ばれています。このガムランはジャワ島とバリ島が主ですが、ジャワ島とバリ島で形式は異なります。静岡大学が所蔵しているのは、バリ式のガムランです。バリ島の方では各村で所有していて、一般の男性が演奏するのですが、地域の集まりなど日常の中でガムランを演奏することが多く、生活の中に根付いているようです。

この楽器の性質としましては、職人の勘によって作られる独特のチューニングで、私たちが普段聞き慣れたピアノだとかヨーロッパの音楽とはまったく違い、ドレミファソラシドではない音階です。また職人さんによって同じガムランでも音がまったく変わってくるという面白い特徴があります。静岡大学が所蔵しているガムランは計24台あるのですが、もしその中の1台が壊れてしまったら、その楽器だけ取り替えるということができないんですね。変えてしまうと他の楽器との調和がとれなくなってしまうので、1台壊れたら全部取り替えなければならない、というくらい一つのガムランがまったく異なるという特徴があります。



(図4) ガムランはドレミではない独自の音階とチューニング



(図5) リズムをサポートする小型のシンバル状の楽器

常にこういう音楽をやっているわけではなく、普段は西洋音楽を勉強しているのですが、このちょっと耳慣れないような演奏を今回このガムランで行いました。

静岡大学ガムラン合奏団について

今度は我々静岡大学ガムラン合奏団についての特徴についてお話しします。合奏団の名前は「ナーダ・ブラーマ・チャルヤ」で、ムジャさんというバリからの留学生による命名です。これはサンスクリット語による「学徒による」という意味です。

メンバーの特徴としては、主に静岡キャンパスの学生が中心ですが、その中でも静岡キャンパス内の全学部、1年生から大学院生まで、幅広く参加しています。また、インドネシア人留学生や、東海大学海洋学部の学生も中には参加しています。

こちらがムジャさん（図6）。岐阜大学連合農学研究科で今現在、静岡大学大学院農学研究科にいます。故郷バリでは幼い頃からガムランを演奏していたようで、今も演奏者として、日本やバリの文化の継承にすごく熱心な方です。静大ガムラン演奏団ナーダ・ブラーマ・チャルヤの結成当初から指導者として携わって下さいました。またガムラン指導の他に、衣装の提供や展示品の提供もして下さいました。



（図6）現地バリでの演奏経験を生かして指導するムジャさん

こちらは小菅由加里さんといって、静岡大学の音楽科の卒業生で浜松市在住の作曲家の方です（図7）。これまでに多くの楽曲提供など、さまざまな場面で関わっていただいています。

今回の国民文化祭の演奏会に向けて、わざわざバリ島まで行って曲の採集をしたり、現地でインスピレーションを得て、オリジナル曲を作って下さいました。当合奏団の曲目については、この小菅さんが作曲したオリジナル曲に加え、ムジャさんが幼いころに耳にした曲を、こちらで再構成して作った両方ともオリジナルの曲を主な曲目として持っています。



（図7）浜松市在住の作曲家・小菅由加里さん。静大ガムラン合奏団にオリジナル曲を提供している

音楽活動を通じた取り組みの成果

今回の国民文化祭での演奏、その活動を通じた取り組みの成果を発表したいと思うのですが、まず大学と地域が連携することによって、国民文化祭という場が学生教育の場として提供されます。それがフィールド教育推進につながって、その大学と地域の連携によって学生が知識・価値観の広がりを得ます。

さらには異文化理解の啓発があります。これはワークショップという場において、地域の方にガムランという楽器を通して、インドネシアからの留学生がたくさんいることや、まったく違う音楽を紹介したりできます。そうすることにより地域の方は大学の存在を認知するわけです。

今回の場合は、行政と大学が手を組み、国民文化祭

というフィールドの中で、学生がガムランという楽器を通じて、演奏の提供とワークショップで地域の人と関わりを持つことができました。市民の方を異文化理解の啓発という教育の場につなげることができたと言えると思います。



学生から見た活動の意義

また、これは実際に学生からあった意見ですが、普段はクラシック音楽ばかり勉強しているため、ガムランは今までまったく聞いたことのない音楽だったということで、「価値観が広がった」「民族音楽に関心を持った」という声や、「子どもに教えることはあっても、大人に教えることはなかったので、非常に良い経験になった」という声も聞かれました。

また、地域の理解の場という意味では、特に焼津市に興味を持った、という声が多く聞かれ、職員の方がすごく熱心だったとか、焼津市の取り組みの素晴らしさに感動したという声がたくさんありました。地域の人にも異文化に触れてもらえて良かった、という声もあったので、実際、先ほどお見せした図のような関係が、実際、学生からも実感としてあるのではないかなと思います。

事例報告 3

リベラルアーツカフェの挑戦

藤井基貴

(静岡大学教育学部准教授)

宮田舞

(静岡大学教育学部4年)



リベラルアーツカフェのはじまり

●藤井

私たちの取り組みは始まったばかりで、ほんのささやかな試みです。私の方からは、まず、何故こういうものを始めたかの経緯を簡単にお話しし、その後、宮田さんから、これまでの取り組みと今後の予定についてお話しさせていただきます。

私は2008年の4月に静岡大学に着任しまして、もうすぐ2年が経ちます。非常に素晴らしい街に来ることができて、嬉しく思っています。食べ物もおいしいですし、自然も豊かで、毎週のように何かイベントが行われている。国文祭もそうですけれども、私が静岡大学に初めて来た時も、おみこしをかついだ子どもたちを見かけて、この街は何か懐かしく、そして不思議な街だと思いました。

先ほどの発表にもありましたが、「よそもの」の視点と言いますか、他県から来ると、やはりこの街は魅力に溢れていると1年過ごして感じ、2年目に入りま

して、どういう人がこの街を支えているのか、直接お話を聞いてみたいという思いが強くなってきました。

何気なく大学の近くにある喫茶店「カフェスナゲリー」のマスターに、「いろいろなイベントが毎週行われているけど、あれはどうやってやっているのか、やってる人にいろいろ聞いてみたい」という話をしたら、偶然にも宮田さんも私と同じようなことをマスターに話したのです。ということでマスターを介して私と宮田さんが同じ目的を持っていることを知りました。ある日、宮田さんが私の研究室にやってきて、「何か一緒に始めてみませんか?」ということで、今年の8月から準備を始めて、これまで3回リベラルアーツカフェを開催しました。

リベラルアーツカフェの基本的なテーマは、静岡にゆかりのあることを、ゆっくりと話し合う場所をつくるということです。

リベラルアーツという言葉は、なかなか馴染みのない言葉かもしれませんが、ヨーロッパやアメリカの大学では、いわゆる「教養」を意味する言葉です。古くは中世からの歴史がある言葉ですが、静岡の知識や情報や知恵などを総括して「教養」としてとらえ、それについて語り合う場所を作りたいということで始めたものです。具体的に今までどういうことをやってきて、これからどういうふうに進めていくかは宮田さんにお話ししてもらおうと思います。

3つのコンセプト

●宮田

私は教育学部で科学教育と理科教育を勉強し、小学校の理科の授業に携わったり、普段は科学教育活動、科学教室の講師などをしながら、いろいろと勉強をしているところです。

私は、この「リベラルアーツカフェ」を立ち上げるにあたって、3つのコンセプトを藤井先生とともに考えました。まずはそのコンセプトから説明させていただきます。

まず一つ目が、「科学と社会の双方向コミュニケーション」。私は科学教育活動に携わっている中で、サイエンスカフェという活動について知る機会があり、そのサイエンスカフェを実際にやってみたいと思いました。

サイエンスカフェというのは基本的に、専門家と市民がカフェで、フランクに科学の会話をしようというものです。そのサイエンスカフェがどういうふうに、また何故活動が行われようとしているのか、全国的に広まっているのかを調べてみました。

例えば、医療の分野などでも専門家が市民に対して説明責任がある、という考え方がありますが、それと同じような知りたいという気持ちから派生しているということが分かりました。また、すでに私たちの知識ではついていけない最近の高度な科学技術社会の産物を一方的に受け取っている受け身の状態にあることが腑に落ちないというところがありまして、コミュニケーションを一番大事にしているのがサイエンスカフェだと着目しました。このサイエンスカフェという活動については、専門家から市民へのトップダウン的な活動ではなく、日常で私たちが温暖化について話したり、問題をあげたりしているように、私たちの生活の中に科学というものが実は根付いているということに気づく活動でもあります。

あとは実際に市民の意見を提供する場としてコンセンサス会議なんかも、頻繁に行われるようになっているのですが、専門家の間だけで合意形成をするというのではなくて、市民の意見を取り入れるという必要性が今出てきているわけです。私たちが行っているリベラルアーツカフェというのはこういうところから視点を持ってきているというのもありまして、そのコンセンサス会議に少し似たような様相がなくもないと考えています。

ただ実際に何を行っているかですが、何かの決定を



するとか合意形成をするとか、そんなかしこまった堅い場ではなくて、たくさんの方が参加することが第一で、市民と科学、学問と積極的に関わる場を作ろうというのが、このリベラルアーツカフェの趣旨です。そして生活の中に溶け込んでいる専門的な知識や科学について考え、意識していきたいという思いから、「科学と社会の双方向コミュニケーション」ということを一つの目標にしていきたいと思いました。

次に二つ目に「Made in 静岡」。私も県外出身者です。今、地下にもお茶のスタンドがありますよね。そこでお茶の美味しい入れ方を教えていただいたり、夜店市や大道芸も毎年とても楽しみにして参加しています。県外出身者の私としては、静岡というのは本当にイベントとか、新しいことが多くて、すごく楽しい街だなという印象を持っています。

ただ、実際、静岡の人にそういうことを言っても、「そうかなあ」という反応で、あまり静岡に住んでいる楽しさを静岡の人は知らないんじゃないかな、と思ったことがこれまで何度もありました。先ほど一社一村しらずおか運動のご紹介がありましたが、地域の人への誇りの回復というのを、私たちもこのリベラルアーツカフェで、何か貢献できないかなあと考えています。

三つ目にあげたいのは「自然科学」「人文科学」「社会科学」の楽しさを広く知ってもらうことです。これはサイエンスカフェから派生したイベントで、もともと理系の高度な内容を扱っていたものを、心理学や教育学のような自然科学とはまた違った科学も取り入れていこうと考えています。私はもともと科学が好きなので専門的な内容もとても楽しいんですけども、それだと理系に苦手意識を持っている人にはやはり参加しにくいですね。そういう人たちに門戸を広げるといった目標も立てています。以上が3つのコンセプトです。

リベラルアーツカフェの活動内容

これらの話を踏まえて、これまでの実践を簡単に報告します。

1回目はプレオープンということで、「カフェスナゲリー」というかわいいカフェで、平成20年のミス藤沢グランプリのバイオリニスト西川奈穂さんを招き、音楽をテーマに交流の場を作ってプレオープンとしました（図1・図2・図3）。

通常はカフェで食事や飲み物を囲んで、なごやかな感じで話し合ったりする会として、大体15人前後で、あえて小規模な形をとっています。

次に第1回が11月28日に行った「静岡の星空」（図4・図5）。この会は「星空公団」という全国に天文普及をされている小野間さんをお招きして、「光害」について、みんなで考えてみようということで会を開きました。環境問題というのは理系文系を問わず、多くの方が参加できる話題だと思っています。お話だけではなく、野外に出て天体観望会も開きました。こういう体験的な活動も含めて、いろいろな形態で運営をしていきたいと思っています。

次に第2回は「大道芸でまちづくり」（図6・図7・図8）。この会は大道芸ワールドカッププロデューサーの甲賀さんにお話をいただきました。参加者の方からは街づくりなどについて、たくさんの質問が飛び交う、とても有意義な会となりました。

これまでの実践は以上の三つだけで、これから成長するところですが、1月31日に「世界の演劇を静岡に」、2月27日に「私たちの生活と心理学」を予定しています。みなさまにも参加していただいて、様子を見にきていただければうれしいなと思っておりますので、ぜひ、ブログをご覧ください。



（図1）会場となった「カフェスナゲリー」



（図2）プレオープンのゲストはバイオリニストの西川奈穂さん



（図3）少人数でわきあいあいたった雰囲気



（図4）第1回「静岡の星空」の様子



(図5)「静岡の星空」では野外で星空を観察



(図6) 第2回「大道芸でまちづくり」のゲストは大道芸ワールドカッププロデューサーの甲賀雅章さん



(図7) 第2回はさまざまな質問が飛び交う活気のある会となった

静岡大がカフェ設立

「静岡ならではの文化を学び、知識を深めたい」。静岡大の学生6人発足の先駆者や研究者と交際する「リベラルアーツカフェ」静岡の教養」を設立した。テーマは「双方向コミュニケーション」。月1回、静岡市駿河区の同大正門前にあるカフェ「エネケリ」(喫茶店)を貸し切りにして、外部講師を招いた自由な語り合いを開催している。

12月中旬、カフェに学舞台展など、会話は弾んだ。甲賀雅章さん、教諭は市井にまで15人が集った。講師は、大井、甲賀さんは「静岡大道芸ワールドカップ」市民多趣味で遠征が静岡を手持したプロたち、でもそんな性格が大井、ユニーの甲賀雅章さん、道にマッチしている。イベントの苦労話や、成功の秘訣(ひけつ)を明かした。

静岡の文化を自由に語ろう

講師「幅広い学問」実践 招へい

自分の言葉で相手に伝えたいの意を語る。「外部講師と参加者の両者にメリットのある語り合いを目指す」。静岡大 代表の田舞さん(教育学部4年)は、自然科、理学部が展開している研究だけでなく人文科学や「サイエンスカフェ」社会科学など教養全般に「静岡」にヒントを得て、ついで、気軽に話し合う相手の話を聞き、考え、場を作りたかったと披露した。

4カ月の準備期間を経て、11月末に実現した初回の集まりには「夜空の明を調査」などに取り組む星架公園の野間史樹さんを招いた。語り合いの後は天体観望会も開いた。年明けには、県舞台芸術センター工部の横山義志さんを招き、世界の演劇を静岡でテーマに話し合う。世話を務める同大教育学部の藤井基寛准教授は「講師探しから運営まですべてを学生自身で行うことで、人とのつながりの大切さを感じてほしい」とも語っている。

リベラルアーツが議論を深める参加者、静岡市駿河区のカフェ「エネケリ」

(図8) 静岡新聞 2009年12月19日掲載

実感として感じたメディアイーターとしての役割

私と藤井先生がこの大学と地域をつなぐという、こういった場に呼んでいただいたのは、とても嬉しいことでした。学生が地域に入り込むことで、大学の学びを地域で生かしているなあ、と私自身も実感があります。リベラルアーツカフェには大学教員も、企業で働いている方も学生も、いろいろな人が訪れているので、そういったいろんな立場の人をつなぐという点では、私たち学生がメディアイーターとして活動を行っているんだなと思いました。

今後の課題と展望ですが、大学で学び、研究されているような専門知識や、地域で生きている人たちが経験として持っている専門知識などを、講演会のような形で市民に提供するのではなく、もっと市民と専門家、学問と社会をつなぎあう場としてリベラルアーツカフェを発展させていければと考えています。

事例報告4

空港開港に伴う静岡市の ホテル旅館の国際化対応と留学生の貢献

鄭眞永

(静岡大学大学院人文社会科学研究科修士2年)

鈴木瑞

(静岡大学大学院人文社会科学研究科修士2年)



●鄭

私は韓国釜山出身で、静岡大学に留学生として来ました。いろいろな方々からサポートしてもらったことがきっかけで、何か地域に貢献できることはないかなと考えていた時に、土居先生と静岡旅館組合の方々とお会いできて、いろいろな仕事ができたとと思います。

●鈴木

私は中国瀋陽の出身です。瀋陽という所はご存じですか？ちょっと北京より北の方で、冬は寒いところです。本日は鄭君と一緒に空港開港にともなう静岡市のホテル・旅館の国際化対応について報告させていただきます。

事業の概要

●鄭

まず、事業の概要は3つありまして、静岡市産学交流センターの「地域課題に係る産学協同研究」の委託事業です。

次に、静岡市ホテル旅館協同組合が中心団体となって申請、協力団体としての清水ホテル旅館組合と静岡大学教員、そして留学生が参加しています。

3つ目が、共同研究のテーマ「空港開港に伴う静岡市のホテル旅館の国際化対応と、国際ブランド力形成に関する産学協同研究」です。

●鈴木

事業の内容ですが、まずは静岡市内3会場で韓国・中国からの来訪客の接遇に必要な中国語・韓国語の接遇会話講座を留学生が講師となり、ホテル旅館スタッフに対して行いました。

2つ目は、多数の外国人来訪客の予約が入った場合、ホテル・旅館から組合事務所に連絡し、通訳兼モニター派遣（訪問で困られたことなどお聞きする）。

3つ目は、人口減少社会の進行とともに、外国人観光客の受け入れに前向きに取り組んでいただくため、旅館ホテルのスタッフを対象としたシンポジウムの開催です。

今ご覧いただいている写真（図1）は、ホテルセンチュリー静岡で行われた接遇会話講座の風景です。今回の講座の特徴としては、会話だけではなく、スタッフの方々にもっと中国、あるいは韓国のことを知っていただくために、中国・韓国の文化や人柄、習慣、タブー等、いろいろなことを紹介しながら講座をやりました。やはり日本と違う文化習慣、人柄でも違うところが多いので、みなさんととても興味津々に聞いて下さいました。もっと勉強したいと毎回講座を受けた方もいらっしゃいました。韓国語講座の会場は静岡ホテル旅館組合の会議室で行いました（図2）。



(図1) 接遇会話講座風景 (中国語：鈴木瑞)



(図2) 接遇会話講座風景 (韓国語：鄭眞永)

事業に参加して感じたこと

●鄭

続きまして留学生として、地域の方々と取り組んで良かったこと、学んだことについて報告します。この事業に参加して一番よかったこと、そして感動したことは、ホテル旅館組合のスタッフさんが韓国の文化と言葉を覚えようと、ものすごく熱心にやっていただけことです。その中で簡単な会話の挨拶ではなくて、本気で韓国語を勉強したいという生徒さんも何人かいました。

自分も韓国からここに来て、みなさんも海外旅行などに行きますと、言葉が通じない時、ものすごく不安ですよね。その時、誰か通訳してくれる人とか、自分の国の人がいるということで、ものすごく落ち着きます。海外の人が旅行を終えて自国に帰ったら、「静岡センチュリーホテルは楽しくて良かった」「細かいところまでサービスしてくれた」という口コミで評判が良くなるということになります。

そして良かったことですが、今静岡県内にあるホテルに行きますと、ほとんど知り合いになりまして、本当に個人的に良かったと思います。この近くにあるホテルのレストランに行った時に、鄭先生が来た時、と

いうことで、マネージャーとかスタッフが来て、おいしいものを持って来てくれるんですね。

●鈴木

今回、任せられた仕事はとても大事な仕事で、静岡の国際化に関わる重要な仕事なので、とても光栄に思いました。静岡旅館組合の講座では、同じ内容の会話はスタッフの方々がいつでも来やすいように4回やったのですが、その中に、どうしても仕事が忙しくて、来られない方が何人かいらして、その方たちは休日を利用して来て下さいました。また夜勤や夕方出勤の方も昼間の講座時間に合わせてきて下さいました。せっかくの休日なのに、もっと休みたいのではないかと、夜勤の方は仕事に眠くなるんじゃないかと、いろいろな心配しましたが、その熱心さに感心させられました。もっと上達したいからと同じ内容の講座を全28回毎回受けた方がいました。その方はすごく上手になって、発音も中国人のようで、これをきっかけにNHKの中国語講座を観たり、中国語の本を買ったりして、本格的に中国語を勉強するきっかけになったようです。最終的にはみんな、もっといろんな言葉が知りたくなって、どんどん質問して下さいました。私も追加テキストを作り、それでも足りないぐらいで、実際の場面を想定しながら演習をやりました。講座を受けたスタッフの方々が全員、本当に中国語の挨拶を上手に使こなせるようになり、本当に嬉しく思いました。最初は本当に何にも話せない状態で、こんなに成果が出せて良かったと思います。

最後になりますが、今回、この貴重な体験を作っていただいた静岡大学の先生方、特に土居先生、また、お世話になったホテルセンチュリー静岡の方々、静岡ホテル旅館組合の方々に心から感謝申し上げます。

●鄭

この事業で一番苦しんで仕事をやっていただいた静岡市旅館組合の理事長、そして荒川さん、本当に感謝しております。ありがとうございました。

事例報告5

地域と大学を結ぶ、 天晴れ門前塾の取り組み

林のぶ

(静岡大学教育学部同窓会)

市民と静大・共同参画をすすめる 「アップレ会」

私は卒業生、そして市民という立場で、この「天晴れ会門前塾」の五期の「頭」を務めましたので、その中身を具体的にお話ししたいと思います。

まず、ここに「アップレ会」というリーフレットがありますが、活動を理解していただくため、分かりやすく作りました。特に「アップレしずおかしこぶるニッポン」というのが私たちのロゴになっておりますが、正式名称は「市民と静大共同企画講座をすすめる会」です(図1)。



満井代表以外に役員はおらず、あとは全員フラットです。毎月一度ずつ集まりまして、次の企画、あるいは門前塾の報告などをいただきながら会を重ねております。

大学の中で学ぶだけではなく、キャンパスを出て、市民とともに学びの場を持ち、時には市民が学生から学ぶ交流の機会を得ることを目的としました。具体的には小二田先生の静岡の文化と、平野先生の情報意匠論、その授業や成果発表会への参加、あるいは経済的支援というのが中心です。かなりの時を要して、これを立ち上げてまいりました。

スタートは2003年の12月で、実際の立ち上げは2004年9月2日ということになります。その軌跡がどのようなになっているかは「アップレ会の軌跡」に書かれております(図2)。

それから「情報意匠論」(図3)、「静岡の文化」(図4)、それぞれの内容についてもリーフレットをご覧ください。



(図1) アップレ会のロゴマーク

appare 其の式

2004年度

9月 「市民と静大・共同企画講座をすすめる会」発足
アップレ会ロゴ発表

10月 「情報意匠論」授業スタート
テーマ:「授業というより、もはやひとつのプロジェクト」

1月 「情報意匠論」成果発表会
アップレ会学生スタッフ編集により、
「天晴双六」創刊



2005年度

4月 「静岡の文化」授業スタート
テーマ:「静岡名所/名物案内を作ろう」

5月 静大へ、第一回目の寄付
※これ以降、毎年寄付を実施

7月 「静岡の文化」授業報告会inグランシップ

10月 「情報意匠論」授業スタート
テーマ:
「粋にやるか
粋にあそぶか」

12月 「情報意匠論」特別授業開催

1月 「情報意匠論」成果発表会



2006年度

4月 「静岡の文化」授業スタート

10月 「情報意匠論」授業スタート
テーマ:「"けり"をつける」

11月 「日本近世文学会」秋季大会inグランシップ
「静岡の文化」成果発表会開催

12月 「情報意匠論」特別授業開催

1月 「情報意匠論」成果発表会



2007年度

4月 「静岡の文化」授業スタート

6月 「静岡の文化」大学見学バスツアー

7月 「静岡の文化」成果発表会

10月 「情報意匠論」授業スタート

1月 「情報意匠論」特別授業開催
「情報意匠論」成果発表会

2月 「卒論ミュージアム」(卒論発表会)開催を後援

2008年度

4月 「静岡の文化」授業スタート

7月 「静岡の文化」成果発表会

10月 「情報意匠論」授業スタート

12月 「情報意匠論」特別授業開催

1月 「情報意匠論」成果発表会




(図2) アップレ会の軌跡一覧

appare 其の参

【現在までの取り組み】

- ・言語文化学科「履修の手引き」の提案と制作
(2007年度。2008年は現在進行形)
- ・静岡大学の「ビジョンと戦略」を共有するための戦略と戦術
(現在進行形)
- ・静岡市御幸町図書館の学生利用者による活性化計画
(就職活動と図書館との係わり方)
- ・静岡市観光協会(現・財団法人静岡観光コンベンション協会)
「静岡市の観光資源を広く学生と共有するためのプランニング」
- ・財団法人静岡観光コンベンション協会
「静岡市駅前地下ショーケースの新しい在り方」
「静岡クィーン・コンテストのこれから在り方」
- ・スパーもちづきに対する広告提案



【情報意匠論 受賞歴】


2006年 静岡新聞広告賞グランプリ受賞
静岡新聞広告賞読者が選ぶ広告賞銅賞受賞
2006年度静岡大学学長表彰

2007年 静岡新聞広告賞奨励賞受賞

2008年 第28回日本新聞協会・新聞広告賞広告主部門優秀賞
静岡新聞広告賞奨励賞受賞
2008年度静岡大学学長表彰

(図3) 「情報意匠論」の取り組み


appare 其の四



【現在までの取り組み】



2005年度
丸子(泉ヶ谷・敷島院)見学会開催など

2006年度
日本近世文学会において、
展示コーナー(一九・印刷文化等)
史跡散策案内(駿橋山麓・丸子路)
オリジナル弁当を作成



2007年度
大御所四百年祭市民参画事業
(大御所マップ・大御所探O帳)参加
長政まつり(人形劇上演)参加


2008年度
マッケンジー邸イベント、
静岡ハリス正教会イベントの企画運営
成沢政江さん(御坂堂)聞き書き、
新入生向け大学周辺地図作成

(図4) 「静岡の文化」の取り組み

appare 其の伍

〈天晴れ門前塾〉
 情報意匠論より生まれた学生の組織です。第一線で活躍する社会人の方々を講師としてお招きして少人数制の講座(ゼミ)を作り、学生が様々なことを学んでいます。
 現在も、アップレ会が、金銭的支援、人脈の支援を行っています。
 以下は今までの組テーマ、組長の一覧です。(敬称略)




【第一期】(2005～2006)

- ・「人脈・町脈を吸収」 石川たか子
- ・「大人ってなんだ?」 久保田隆
- ・「静岡を知り、“き”を育て、“もり”になる」 佐野恵子
- ・「挑戦 リーダーの心得」 辻 昭
- ・「仕事の楽しさ!」 満井義政
- ・「戦争について知ろう」 山本 肇

05.11月 第一期「天晴れ門前塾」活動スタート
 06.3月 「天晴れ門前成果発表会」堂入事始」開催

【第二期】(2006～2007)

- ・「種」を植えました」 内田美紀子
- ・「言葉と出会う!」 久保田明
- ・「駿府・静岡ここにあり!」 黒澤 脩




- ・「未来予想図を描こう!」 小池 隆
- ・「きっずもっちクラブ」 繁田哲矢
- ・「働き方・生き方」 園田正世
- ・「一輪に始まりお握りに結ぶ」 田島和子
- ・「枝分かれした その先に」 林 のぶ

06.11月 第二期「天晴れ門前塾」活動スタート
 07.3月 「天晴れ門前塾」成果発表会「堂入事始」開催

【第三期】(2007～2008)

- ・「農のくらし」 海野フミ子
- ・「きれいになる」 高木敦子
- ・「鐘鳴らすシネマに習おう」 藤原東演
- ・「現場に学ぶ日本経済」 武藤 清
- ・「宝さがしの旅に出かけよう」 藤井ゆずる




- ・「カフェ論」 吉崎孝介

07.11月 第三期「天晴れ門前塾」活動スタート
 08.3月 「天晴れ門前塾」成果発表会「堂入事始」開催

【第四期】(2008～2009)

- ・「限界集落と女性」 大國田鶴子
- ・「新聞記者の世界」 河合修身
- ・「静岡遺産たんけん隊」佐野恵子
- ・「人生の分岐点… さあ、どう動く?」 杉山 孝
- ・「呑む、観る、伝える」 鈴木真弓



08.11月 第四期「天晴れ門前塾」活動スタート
 09.3月 「天晴れ門前塾」成果発表会開催

(図5)「天晴れ門前塾」の取り組み

「天晴れ門前塾」の概要

今日ご報告します「天晴れ門前塾」(図5)は、今年度で第五期を迎えております。その五期の中で私の組につきまして、具体的にご報告をしたいと思いません。

五期のメンバーは奥野組、田宮組、林組、満井組の4つの組から構成されております。奥野組は静岡県舞台芸術センター SPACの舞台俳優さん、田宮組は田宮模型の会長さん、それから私と、ここにおられます代表の満井さんです。

門前塾は、この「情報意匠論」と「静岡の文化」を受けた学生さんたちが、今度は自分たちで大学を出て学ぶということで、学生スタッフを中心に、どのようなことを学びたいかということを考え、その中から講師を選び、講師と交渉して、門前塾の第五期を立ち上げるという過程をとっております。

この天晴れ門前塾では、まず顔見世会を行います。「頭」^{かしら}がしかけていき、どんな中身でこの会を持ちたいかということを学生に話をし、どの組で学びたいか

を決めます。

学生たちは、私たちを「頭」と言い、その後にリーダーになる人を「副頭」という形をとって活動をしております。今までは「頭」ではなくて「組長」と4期までは使ってきたのですが、街を歩いて声をかけられた「組長」さんが、大変な思いをされたという経験から、「頭」ということになりました。「頭」は「副頭」を中心にスタートまで、どんなふうにもこの一年間を過ごしていくのかというスタッフの想いを汲み上げて、相談をしながら、どんな内容にしていくのかということを決めていきます。組活動に参加する学生は「小僧」5名です。

恋愛しゃべり場 ～林組のテーマ～

私が「頭」を務める林組・「副頭」の酒井さんは、ジェンダーの勉強をしたいということでジェンダーの概要説明などを第1回目でしたしました。しかしジェンダーというと、どうも最初から嫌いという方がいらっしやる。「小僧」たち自身も、そういう認識を持っているということで、テーマは「恋愛しゃべり場」という角度から入りたいということだったんですね。それを受けてジェンダーについて、きちっとした考え方を持ってもらいたいということで、第2回のゲストは、法律について、特に男女共同参画基本法その他あらゆる形態の女子に対する差別撤廃に関する条約（略して女子差別撤廃条約）など、前あざれあ事務局長の戸塚宏一さんをお願いしました。

なお、これらのゲストの方の報酬はゼロです。もちろん交通費もすべてゼロ。「頭」のネットワークでどういう方をお願いをするかを決めまして、相手のご好意に甘えてということになっております。

第3回は大角充良さん。現在のあざれあ事務局長ですが、もとは男女共同参画室の室長だった人であり、なおかつパートナーと共働きをしておりますので、そういう面からもお話をいただきたいということでした。

第4回には、現在活躍中の男女共同参画室室長とそれに関わる主査のお二人、荻原室長と青野主査をお願いしました。この人たちもお互いに共働きという立場で、この共働きという視点からぜひお話を聞きたいというのが多くの学生たちの考えでした。

第5回は、角度を変えまして、絵本の作家草谷さんに絵本から見るジェンダーということで話していただくことになりました。草谷佳子さんのお宅に伺い、文庫を見せていただき、絵本にみるジェンダーについて、お話を伺いました。その上、同時に夕飯までごちそうになり、大いに歓迎をしていただきました。「小僧」たちは実際に読み聞かせの指導をしていただき、その絵本からかなり心の中にしみるものがあったように感じています。

第6回は、メディアリテラシーという視点から、専門家の平野先生に、様々な角度からお話をいただきました。

第7回目は、県下の男女共同参画・福祉関係消費生活のリーダーで勉強会を持っている「もくようの会」のメンバーとワークショップとディスカッションをしました。それぞれが別のテーブルでワークショップを

しました。結婚のプラスマイナス、恋愛のプラスマイナスというのをお互いに話し合い、後でこれをつきあわせていきました。特に、「もくようの会」の人たちからは、「若い頃を十分に思い出させてもらった」とか、「もういちど結婚に対する認識を確かめた」とか、「是非こういう大学生と話をする機会がほしい」「とても心を動かされた」ということで、とても良い時間を共有することができたと好評でした。

最後に、組の学びのまとめとして私はいっさい手を出さず、「小僧」たちがどうまとめるかを待ちました。小僧たちは、これまでの学びでジェンダーをどうとらえたかを絵本「なにいろ」として、成果として発表しました。

最後に私自身、こんな年齢までできてしまっておりますが、やはり若い学生さんたちが考えるジェンダー観と、私たちの持っている今までの価値観、そういうものが大いに刺激されました。私が思っていた以上に柔軟な心に触れ、また是非これからも応援したいと思いました。

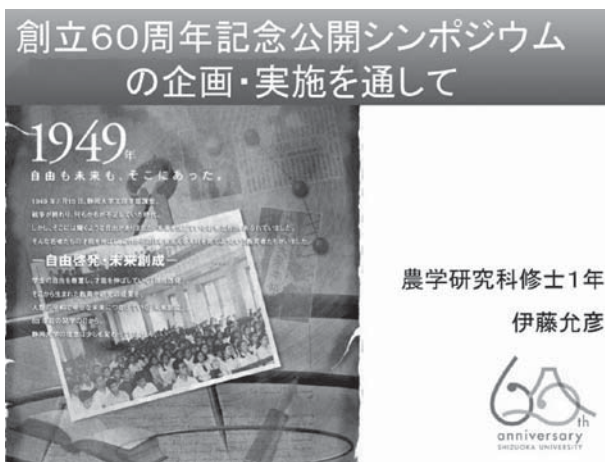
事例報告6

創立60周年記念

公開シンポジウムの企画・実施を通じて

伊藤允彦

(静岡大学大学院農学研究科修士1年)



積極的に関わろうと思っている学生が多いと思います。そういった「学び」を深めるために、地域連携、貢献活動に関心が高いのに、どうすれば活動的になれるか、どうすれば社会連携できるか、そのアクセス方法がわからない。

また、一方で、これは2007年度にうちの大学で実施しました、学生生活に関する定量調査の中で関係あるところを抜粋しました(図1)。

魅力ある授業、すすんで受けたい授業が多いというのは、評価も低く、改善要望も高くなっています。学外に向けた大学のPRがなされているかという評価は低いのですが、こちらの改善要望も低くなっているという現状があります。

私個人の考えですが、魅力ある授業という中では新しいことを学びたい。そういった中で、地域連携というものは学生の学びに対して非常に効果があるものと思うのですが、それを実現していくためには、大学をもっと地域の人に知ってもらう必要があると思います。そういった学外にむけたPRが実現していけば、魅力ある大学での学びや、社会参画の機会につながっていくのではないかなと、私は考えております。

たとえば「一社一村しずおか運動」(図2)を例に出しますと、先ほどの報告にもありました取り組みで学生が学ぶにあたり、やはり農学部の大生活で学生がどういうことを学んだというバックグラウンドがあった上で、実際に現場に出てみて、そこでの学びと成長、生きる手がかりを得ていくといった結論に達すると思うのです。こういった部分は、やはり当事者の意見、そこに行った学生が何を学んだか、そういうものがちゃんと学生の生の声で届く機会がなければ、見えにくいことだと思えます。それが見えてくれば、今

学外にむけたPRを

私は、創立60周年記念を学生主体で公開するシンポジウムを行うにあたり、その企画と実施を通じて考えたことについて報告します。

まず、注意事項として先にご説明しなければいけないことがあるのですが、他の事例報告と異なり、私が報告することは、すでに実施した企画ではなく、今度の2月13日に行うシンポジウムの内容になります。今度行う企画のシンポジウムは、「学生から静岡大学へのバレンタインプレゼント」というタイトルなのですが、これを通してメディアエーターとしての学生ができることや、そこで学ぶことは何かという視点で報告いたします。

静岡大学1年生教養授業「キャリアデザイン」講義内「大学での学びと成長」での学生の感想を抜粋しますと、やっぱり学外での活動に積極的に参加して、学びを深めたいという意見や、どうすれば学外に対してもっと活動的になれるかといった、大学の外に対して

回の大代で行われた取り組みも、どういう学びがあって、どういうものがバックグラウンドになっているのが分かれば、もっと他の所から参画しやすく、地域の方も入りやすくなったりするのではないかと思います。

今までの話を整理しますと、現在の課題としては、地域連携活動を含めて、学内での学びと成長が、学部が違うだけで学生の間でもブラックボックスになっており、地域社会に対しても、静岡大学で何をやっているのかなかなか分からないところがあるように思います。そういったことを当事者の意見を通して発信することによって、内外に対して学びと成長が開かれた大学の実現につながるのではないかと考えています（図3）。



学生から静岡大学へのバレンタインプレゼント

今回、私たちの取り組みとして、この60周年企画・記念の事業を、学生主体でシンポジウムを行うことにより、新しいきっかけになるのではないのではないかと考えて企画しました。

実際に、それがどのようなものかといいますと、静岡大学の60周年記念事業の学生主体シンポジウムとして、「学生から静岡大学へのバレンタインプレゼント」というタイトルで、事例報告とパネルディスカッションの二部構成で行います（図4）。

事例報告としては、その大学での学び、教授からの専門的資料や、ともに学ぶ仲間を作ったこと、社会貢献の機会などがたくさんあるのですが、そういった、まだ表に出てきていない取り組みを学生の生の声で大学に発信することで、大学での学びと成長を明瞭化い

たします。そういった事例報告を受けてパネルディスカッションを通し、実際にそこでの学びをもっと具体的に話してもらったり、もっと多くの人に入ってもらったり、自分たちにとって良いものになりたい。学生として組織として活動しなければならないものがあるかを話し合い、学生、受験生、地域社会にとって、ワクワクするような静岡大学を実現するための仕掛けを考えたいと思います。

このシンポジウムがバレンタインに近い2月13日ということもあり、学生から静岡大学へのバレンタインプレゼントと題しまして、新しい静岡大学を作るきっかけとなるようなものを提案できたら、と思っています。

ゼミの価値と学内の省エネ活動

実際の事例報告として、いくつか紹介いたします。

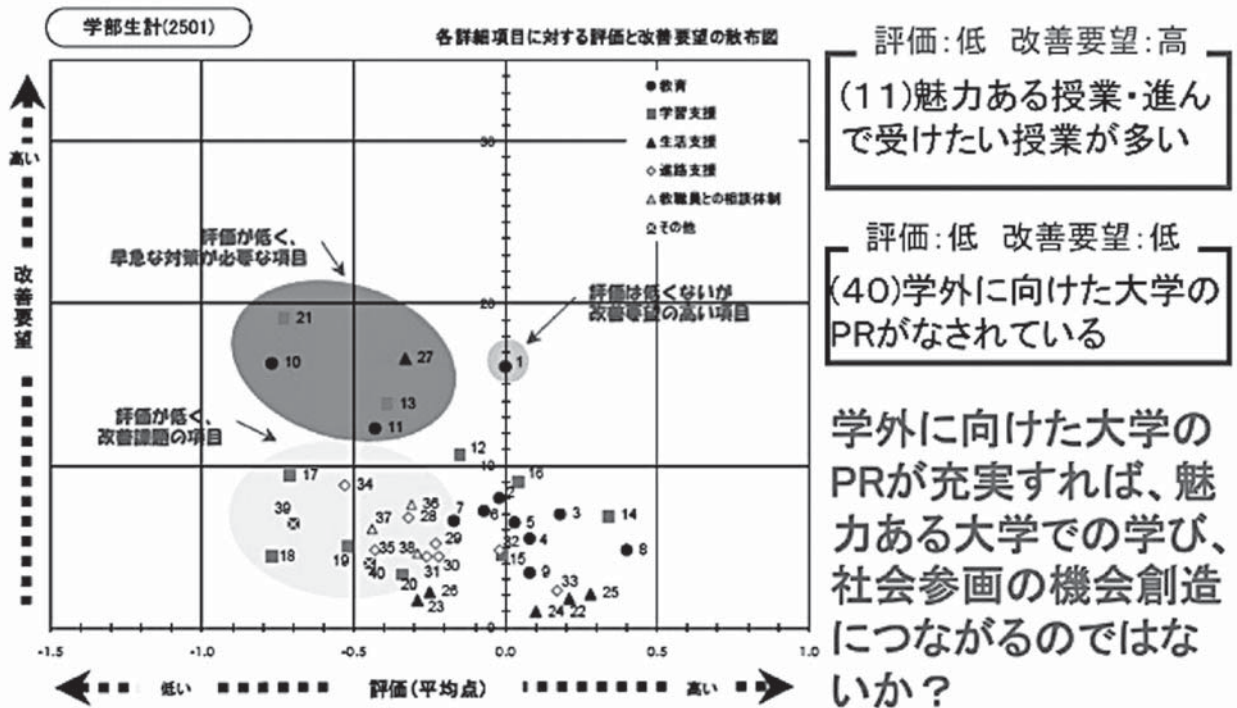
ひとつは静岡大学の情報学部の4年生の学生が、「ゼミでの学びはなかなか表に発信する機会がなく、でもそこでの学びが後にいろいろ役に立ったことを是非話したい」ということで、ゼミの価値についてその学生に報告してもらいます。

ゼミといっても学部で全然違います。理系と文系ではゼミの形態も違いますし、そこで学ぶこともかなり変わってきます。彼のところは毎週、週に1回本を読んで、その感想文を1000字で書いて、さらに自分の今の生活と照らしあわせて「気づき」を書くというものでした。そのことが就職活動などその後いろいろなことに役に立っているということを話してもらいたいと思っています。

もうひとつは手前味噌で恐縮ですが、私は大学の省エネ活動、大学内の環境活動に取り組んで行けないかということで組織を組み、静岡大学の省エネ活動を行っています。教職員と学生が連携して行う学内での環境に対する貢献活動でのシステムをもっと外に発信できれば、他の団体などでも使えるのではないかと思います、紹介していきたいと思っています（図5）。

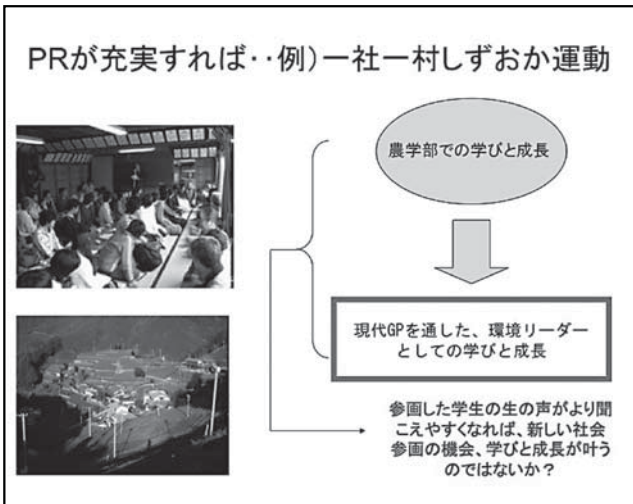
60周年記念事業シンポジウムの役割

私が今度行うシンポジウムで何が新しいかといいますと、やはり静岡大学の60周年事業という大学の公式企画で、学生がシンポジウム行うことだと思います。60周年記念事業のシンポジウムを行う専門部会には先生方も参加されているのですが、その委員の一人として学生の私も参加させていただいています。おそらく今までになかったことだと思うのです。ちゃんと学生と大学とが、つながりあう。今まではかなり大学と学生が離れていたところもありましたが、他の学部の取り組みでもつながりやすく、情報発信という部分でも大きな意味があるのではないかと思います。私自身、農学部で研究していることは、土石流と山崩れの研究で、まったくこういう内容と関係ないと言ってしまえばそれまでなんです、シンポジウムをきっかけとして、もっと学生と大学が近くなるような企画を行っていくようなになればと思っています。

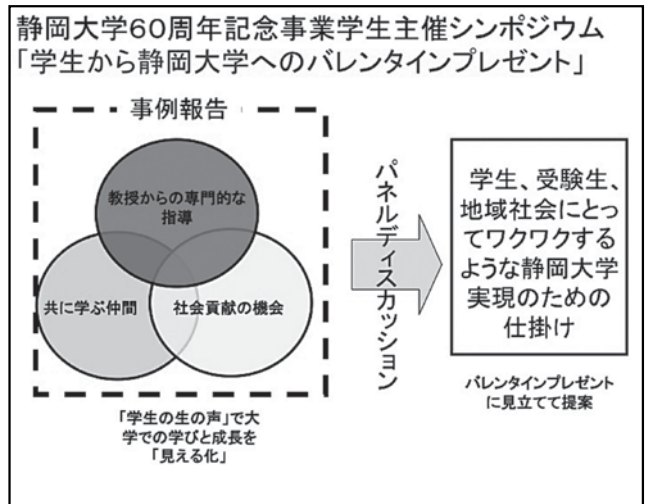


※2007年度実施「学生生活」に関する定量調査より抜粋

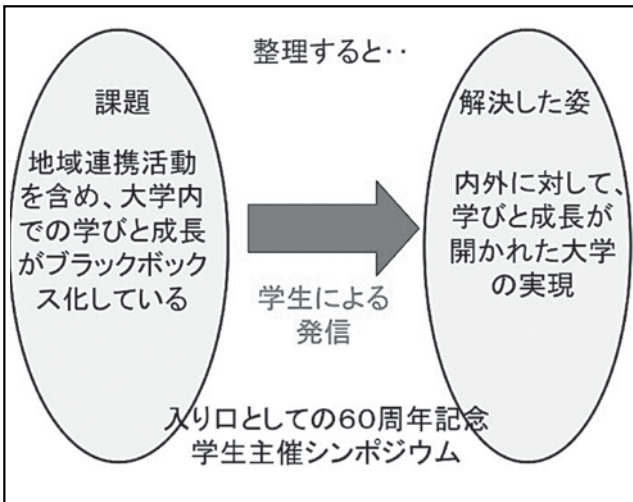
(図 1)



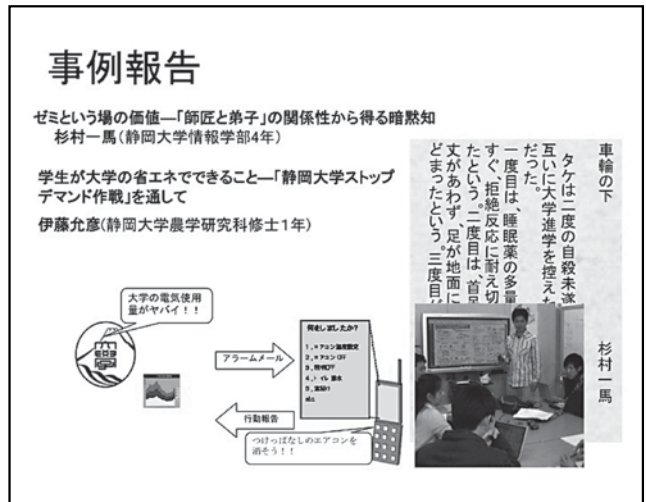
(図2) 例) 一社一村しずおか運動



(図4) シンポジウムの構成



(図3) 学生による発信



(図5) ゼミの価値と学内省エネ活動の事例

パネルディスカッション



●満井

それでは、定刻になりましたので進めたいと思います。私も何回かこういう役割をお預かりしたことがございますが、これだけ多くの方のパネルディスカッションは初めてです。

では、最初に私の方から片桐先生と竹之内先生に伺いたいと思います。これまでの事例報告を聞いていると、見事なほどに学生の自主性を引き出されていますね。これは先生方のお力はもちろんのこと、学校・地域の方のご支援があつてのことだと思いますが、何年かにわたる授業の中で先生のご苦勞などを具体的にご紹介いただきたいと思います。他のチームの参考にもなるかと思っております。

●片桐

山形から4時間かけてきましたが、今日、これだけ学生さんたちのすばらしい活動と、地域の方々があつ

かり学生さんを支えている姿を見せていただき、とても勉強になりました。

基本的に学生との付き合い方なんですが、さきほど申し上げた東北芸術工科大学でチュートリアルという活動は単位にはなりませんし、それから教員にとっても、学内の実績になるわけでもないんですね。

ただ、地域に出て行って学生とともに活動することで得られる教員側のいろんな刺激ですとか、学びというものもあって、やめられないんだろうと思います。どうしても大学というところは、専門の中で物事が進んでいってしまうので、学科コースを越えた学生たちとの関係から生まれるものが魅力的なんだろうと思っています。

それから、学生たちが地域に入った時に、指導者もフィールドに入って、先生自身が何を求めているか、自分の求めているものを一生懸命、学生に見せながら活動していくことが重要だと思います。そこが抜け落

ちてくると、結局、学生の気持ちが冷めてくると思います。

僕も実は50代になって、学生と共にいるということについて段々しんどくなってきているんですね。現代GPの時には、3年間は支援という形で事務局が立ち上がって、そこに何人かの若いスタッフがいて、そのスタッフが僕の手が回らないところを助けてくれた。そういう支援が現代GPの補助金がなくなるとともに、大学側の方からなくなって、また僕と学生だけの活動になっていくのかな、という不安があります。

もうひとつは、口を出すタイミングが難しいと思います。学生の自主性に任せた時に、うまくいかない時とか、明らかに方向がずれている時があるんですが、どのタイミングで、どういうふうに、教師がそれに口を出し、アドバイスをするとかというタイミングが常に難しいと思ってやっています。

●竹之内

片桐先生と重複する部分については発言を控えるとして、基本的な見方として、教員と学生の別なく、誰が参加しても面白いものは面白いという発想があります。先ほどの農村での活動でも、「先生」は地域の方なんです。私自身が土地の生活に非常に魅了されていて、そういう意味では私が教員として何かを「教える」というより、地域で共に「学んで」いく。そのなかで、学生よりは私の方が人生経験が多少豊かであるという局面が出てくる、ということになります。

それからもうひとつ、教員の「役割」といった時に、学生もそうですし、地域の人もそうですが、ひとりで全部を担うことはできないですよね。実際問題としても、いろいろ多様な役割があるわけです。ちょうど今の私たちの周りに、いろんな個性の人間が集まって、いろんな役割を分担して、それが、プロジェクトがなんとなくうまく展開している秘訣かなと思っています。

●満井

ありがとうございます。佐々木さんは、本当に農村に移り住んで、住民票も移したそうですね。お世話になっている方が今日お見えになっていらっしゃるということですが、もしよろしければ、若い学生さんとうまくやっていらっしゃるコツのようなものがあったら、ちょっとご披露願えますか？



●志村

コツは特にないですけど、普通に自分の子どもみたいに接しています。梅ヶ島の僕らのところは、中学を卒業してしまうと、高校まで40km以上もあるので通えないんですね。なので、その時点で下宿してしまって、特に女の子はそのまま嫁に行っていなくなってしまいます。だから長い人生の中で15年ぐらいしか、子どもと一緒に暮らせないのです。

下宿すると、人様にお世話になる。子どもを世話したことがないので、逆に学生が居てくれる方が嬉しい。最初のうちは、じいさん、ばあさんなんかは「あ～いるんだ」とか言うんですけど、しばらくいると、もう普通になってしまう。うちの息子も佐々木さんのおかげで影響を受けまして、今年から農業をやるって帰ってきました。そんな効果もありました。あんまり“やっちゃん”(佐々木康之の愛称)と関わり合うから、ちょっと嫉妬して帰って来たのかな。

●満井

今はほとんど息子さんと同じようなイメージというか、そんなに肩肘張った形ではなく、気軽なお付き合いの延長線上にいるんですね。

●志村

特別扱いは最初からしないし、遠慮もするな、と言います。一緒に晩酌もします。

●満井

片桐先生のところのプロジェクトですと、田麦野という非常に小さな地区の場合には、小さいからこそ慎重に、と報告をいただいたような気がするのですが。

●片桐

入り方はそうでした。

●満井

その辺は気遣いですか。

●片桐

やはり突然行ったらびっくりするだろうな、という思いがありました。先ほど申し上げたように、先に先生が行って、先生と地域の方の関係があった上で学生が行ったわけではありません。僕が入ろうと思ったら学生がどんどん先に入ってしまった、僕がもう入れないような状態にまで、学生と地域の方が良い関係を作ったというところがあるのです。

飲んだり食べたりすること、一緒に働かせてもらうこと、それからお祭りを一緒にやること。これらは地域の方にもすごく喜んでくれます。かつて、そういうものを通して人がつながっていた。ところが、祭りができなくなる、労働がなくなる、飲み食いする場がなくなる。そういう形で人間関係がバラバラになっていったものを、学生が行くことによって、祭りの場や飲み食いの場が復活してくる。その中に1週間、2週間、1ヵ月と学生が泊まらせてもらえるようになって、それがまた学生にとって魅力を高めていくというようになりなりました。

●満井

そうはいっても、ここにちょっとこだわるのですが、先ほどDVDで見たSBSのテレビの番組で、茶摘みをやっているシーンがありましたよね。あれは手伝うのではなく、邪魔になっているような感じに私には見えたのですが（笑）、あれを地元の茶摘みのプロの方々がよく我慢されていると思いました。あんなものでしょうか。

●志村

1年目の時は、お茶の手伝いはしない、ということだったんです。というのは、結局、忙しい時に来ても面倒を見切れないと思ったからです。1年目が終わった時に、みなさんの感想が「なぜ、忙しい時に来てくれないんだ」と変わっていたわけです。

それで次からは、じゃあお茶摘みに来ましょうってことになりました。初めてのお茶摘みは、誰でもあんなものです。やっぱり慣れです。2年目、3年目になれば、上手になってきます。昔、自分たちが下手だったことが分かっているから、我慢するんだよ、きっと。

●満井

その辺のことを、ちょっと佐々木君に聞いてみたいのですが、地元の方との馴染み方についてはどうですか。志村さんはいいお父さんですか？

●佐々木

そうですね。すごくお世話になっていまして、もう、志村さんにお世話にならなかったら、今、僕は何をしていたんだろうという感じです。今、自分は大代に住んでいますが、大代と関わる前は本当に駄目な学生で、農村に関わること自体、授業というお膳立てがなければできなかったと思います。

それで、授業の初めにたまたまついて行ったんですけど、先生方も熱意を持ってやっていることに触発されたりとか、地域や行政の方に期待をかけられたりということで自覚が芽生えてきて、頑張ろうかなという感じになっていったのではないかなと思います。

●満井

先ほど竹之内先生が、「地域の方が先生だ」とおっしゃられましたよね。そういう実感はありますか？

●佐々木

ありますね。僕の場合は高校までは受験勉強ばかりで、社会で働いている人と接するなんてことは一度もありませんでした。それから大学に入ってバイトをいくつかやりましたが、お金をもらうだけという感じでした。ですが大代の方は、人間と人間で接してくれて、いろいろなことを教えていただき、そういうところはやっぱり「人生の先生」という感じです。

●満井

晩酌も一緒に？

●佐々木

はい、飲みながらいろんな話を聞いたりします。例えば坂本龍馬のお話を聞いたり。

●満井

ありがとうございます。今日の7つの事例報告の中で、最後の伊藤さんの報告だけが違うかなと思いましたが、それ以外の報告で共通しているのは、地域、大学、先生、学生といういくつかのファクターがある中で、地域連携は「よその意識」ではないか、ということなんです。



大学を学生が見るのではなく、地域の人や中国や韓国の方が、日本という国や静大という大学をどう見ているか。地域連携の視点は「よそもの」視点だと藤井先生がおっしゃったのが、非常に印象に残っているわけですが。

●藤井

私は、まだ大学教員になって日が浅いので、この静岡の地にどう馴染んで自分の実践を展開していけるかということが課題になっているわけですが、学生との関わりに関して、二つ意識をしていることがあります。一つは、巻き込み型の学習。もう一つは、今日何度かでてきたキーワードの「ワクワク感」。学生の中にどう「ワクワク感」を持たせるかということです。

一点目の巻き込み型というのは、もともと大学というのは、18世紀、19世紀ぐらいまで、学問の自由の名のもとに、社会から離れた状況で、象牙の塔と呼ばれて批判をされた時期もありました。20世紀初頭ぐらいからアメリカで大学拡張の運動が始まって、大学の中に教育プログラムが増えてきて、地域の人が大学に行ける機会も増えてきたと思います。最近では、日本の大学でも、今日のシンポジウムも含めて、大学と学校、大学と社会の学生を介して連携していくということが強く意識されるようになってきました。こうした流れのなかで学生にどのような学習の場を与えていくかが課題となってきたのだと思います。

その際に、巻き込み型ということですが、大学教育でも、いろいろな手立てが今考えられています。ベンジャミン・フランクリンという人が、「言うだけだと

忘れてしまう。教えてくれば覚えている。巻き込めば学ぶ」(Tell me and I forget, teach me and I remember, involve me and I learn) と言っていますが、私自身の体験からも、活動に巻き込むということが、学生の学びの動機付けとして一番大きいという実感を持っています。それがリベラルアーツカフェのコンセプトとして取り入れていることでもあります。

もうひとつの「ワクワク感」ということですが、学生の一番の強みはフットワークの軽さだと思うのです。学生だからいろんなところにアクセスできるということでもあります。このフットワークによってネットワークが広がっていく。フットワークからネットワークができ、そしてワクワク感が生まれるという、ダジャレのようになっていますが、そういうことを意識しています。

ネットワークというのは、日本語でいうと、「縁」という言葉になるかもしれませんが、一方で、日本の社会は、職縁が強く仕事をやめると無縁な状態になりやすいともいわれています。ということで、社会のなかに縁を作り出すような働きかけができる人が求められているように思います。大学には、お金を生み出す、つまり「円」を生み出すというよりも、「縁」を作り出すような人材を育てることが期待されていると思います。

●満井

ありがとうございます。小西先生にも同じようなご質問を投げかけたいわけですが、今の話に出てきた「ワクワク感」や、あるいはそれがネットワーク化されて

いくことが、先生のやっという幅広い活動の中で感じ取れるのですが、その辺りはいかがでしょうか？

●小西

ご質問にお答えする前に、私自身は活動のスタンスを東北芸術工科大学の例で紹介のあった「チュートリアル」と位置づけています。要するに、授業でもなくサークルでもない立場で活動しているのですが、授業とどう関連付けるか、学生をどうやって確保していくか常に悩んでいます。ただ、活動においては学生と先生という関係ではなくて、対等の立場で自分も学び共に考える立場になります。そのことによって、「ワクワク感」が生まれると思っています。やっぱり自分が面白くないとみんなも面白くないだろうということで、まずは自分も楽しむこと。そして限られた条件の中で何が工夫できるのかということ、いつも考えています。

●フロア

佐々木さんに伺いたいのですが、最後の展望のところで、「農繁期の労働力としては十分期待に応えられていると感じる。地域の問題の解決については、その解決は容易ではなく目立った成果は残せていないが、解決に向けて着実に進んでいるという印象。今後の展開に期待」と話されました。「労働力としては十分期待に応えられている」というところですが、大代地区では高齢化が進んでいて大変で、そこへ何しに行ったんですかと聞きたいのです。というのは、労働者はみんな年とっていきます。どんどん農地が放棄されて、お茶も放っておいたらなくなるかもしれませんね。それを保存しようと思ったときに、忙しいから一時的な労働力でそれを応援するという案ではなく、何かもっと根本的な解決策を考えるのが研究者や大学生なのではないかと思うのです。そこを伺いたいと思います。特に農学部の人だったら、今、周りは畝になっているけれど、こういう形で良いのかを考えてほしい。一番茶は手摘みしますが、あれは大変な作業です。品種改良して機械で摘めるような方法でその問題を解決していくとか、そういう方法もあると思うのです。

●佐々木

まず、「労働力として十分応えられている」ということについて少し補足しますと、学生が来ることができるのは長期休暇以外では土日だけですので、実際の

労働力としては限られたものでしかないと思います。

実習初年度は、学生がどのくらい動いてくれるかということが地区の方も分からなかったのも、忙しい時期は避けていたのですが、翌年からは「忙しい時期に来てほしい」というように変わり、「うちは何人欲しい」、「うちは何人」というようにひっぱりだこです。このように限られた労働力やその量の範囲内で、期待に応えられているという意味です。

ただ、やはりそれだけでは一過性のもので終わってしまう。ですが、この授業のコンセプトは、実際に農村体験をしてみても地域の問題を自分の視点で見て、探して、それを解決に持っていくというもので、単なる援農活動で終わるものではありません。

コンセプトはそうなのですが、やはり実社会の問題は、学生が2、3年やったくらいでは到底解決できるものではありません。学生がちょっとやってできるくらいだったら、もう地区の人がやっているはずですよ。

実習が始まってから3年経った今の段階では、スライドにもありましたが、フリーペーパーを使って情報発信をしたりとか、梅ヶ島のお茶の流通を調べたりとか、どう売ったら儲かるのかというようなことを、地域の問題の根本的な解決には至っていないのですが、学生自身が考え、一応形に表したという意味で、一歩踏み出しているという印象です。

僕自身のことについて少し話すと、僕はこの授業をとっているわけではないのですが、実習が始まった当初から関わってしまっていて、僕ができることは何だろうということを考えています。組織を作ったり会社を起こしたりしてお茶の流通を変えていく、また会員を募って定期的にも買ってもらえるようにするとか、グリーンツーリズムを合わせてやっていくというような、そういう新しい展開も今、考え中です。まだ形にはできていませんが、それは今後の課題です。

●満井

先ほど、「よそのもの」の視線が社会に対する好奇心につながっているというお話がありました。しかし好奇心の中身をよく見ると、そんなに変わったことではなく、合理的な生活を求めることでもなく、普段の生活に学生たちがフォーカスをしている。そういった新しい世界に興味を持っていくことが「学び」の土壌になっているのではないかということだと思います。

留学生の鄭さん、鈴木さんのお話の中でも、お2人が通訳を通して、大学生活だけではない新しい世界で楽しめている様子が伝わってきました。そのおもと

のエネルギーになっているものは何なのか、お答えいただけますか？



●鈴木

今の不景気の中で、静岡で就職先を見つけることが難しく、東京の方が静岡より就職しやすい。日本語学校の先生になるにしても、東京にはいろいろな企業がありますから、静岡にはあまり良い人材が残らないのではないかと少し心配しています。

私も鄭さんもそうですが、静岡が大好きな人もたくさんいらっしゃるの、なんとか静岡の国際化について力を尽くしたいと考えています。そんな中でちょうど先生がきっかけを作って下さって、頑張ってる気持ち満々でやりました。

しかし実際には、残された課題はまだたくさんありますね。例えば、私は浮月楼で行われた結婚式の通訳の仕事をやりました。その新郎さんは日本の方で、新婦さんは中国の方です。その新婦さんのご家族が結婚式に参加するために静岡に来たので、通訳しました。その時、新婦さんのご家族に「静岡はどんな印象でしたか？」と聞いたのですが、その答えにビックリしました。「静岡はあまり知らないの、日本に滞在の一週間はほとんど東京で過ごしていました」と言うのです。とてももったいない話です。静岡の知名度をもっとアップさせないといけないな、と思いました。

また今回、挨拶を中心とした会話研修の講師をやったのですが、もし外国から大勢の観光客が来た場合、観光客からの質問に応えられるスタッフは、ホテル・旅館にほとんどいない状態です。一流のホテルでもそうです。静岡市のホテルなどは、そういうところが少し遅れていると感じます。

ですので、東京やディズニーランドに外国からの観光客が多いというのも分かります。その会場のほとんどに中国語が話せるスタッフがいて、フロントでも中

国人スタッフがいるからです。

静岡のホテルや旅館紹介のパンフレットでも、中国語・韓国語のないホテルがたくさんあります。日本人は読めますが、外国人の立場で考えると、パンフレットがないと分からないですね。やはりまだ今は日本人中心で考えています。

でも今後は、空港開港によって変わってくると思います。中国人もほとんど個人で海外旅行できる時代になってきています。4、5年後のこと考えると、今の状態にちょっと心配しています。私たちは機会を作って、自分の力で貢献することができればいいなと思います。

●満井

伊藤さんに伺います。先ほど伊藤さんの報告の中で、「伝える」ということを盛んにおっしゃっていて、もちろん学内でどう伝えるか、それから学外に自分たちの活動をどう伝えるか、というのも大きなキーワードではないかと思います。自分たちが今やっている動きを人に伝えていかないと理解されません。その伝えることに関して、今、大学や学生たちがやっている地域連携のことで、こうしたらうまく伝わるのに、ということがあれば、ぜひアドバイスをいただきたいと思っています。

●伊藤

アドバイスができるような立場ではないのですが、こういった地域連携の中で、学生がどう取り組んでいるかを伝えようとした時に、やはりどうしても、「こういう結果を出しました」「こういう形で取り組んでいます」といった手法をとりがちになると思います。

例えば農学部の学生が、大代という山間部に行っ、そこで農作業をした。ではそこで何を成し遂げたかということにどうしても注目が行きがちですが、今日のテーマでもある「地域連携」という面から考えてみると、そこもひとつの学生の「学びの場」である、という視点が大事だと思います。

もちろんそこで結果を出せばいいのかもしれませんが、そこで学生がいったい何を学んだのかという部分が出てこないと感じます。僕たちがそこで何を学んだのかということを持ち帰って、自分自身の専門的な研究に生かしていくということが大事だと思います。そういう意味で、成果によらない、「何を学んだか」というところに焦点を当てた情報発信を、学生自らが作っていかねばならないと思います。



●満井

はい。分かりました。ありがとうございました。

今日のほとんどの活動に携わる方々は、無報酬で、しかもお互いの生活の喜びを大学生と地域の方々が共有できている。このエネルギーが活動を支えているのではないかと思います。

仕事を越えた共有感のようなものがベースになっている。だから、会社における商品開発などとは少し異なるものであると思います。これは学生が持っている知的な財産をどう生かすかという、非常に根本のところと共通するものがあるかもしれません。そういったものが、地域連携を支えている大きなベースになっていると感じていたところです。

チュートリアル活動もまさにそうで、林先生のご報告の中にもありましたので、ぜひ、林先生、あるいは片桐先生からそのあたりのことを伺ってみたいと思います。

●林

大学の先生でも、外の間人でも、きっかけ作りがとても重要であることを強く感じました。それから、せっかくそこで持った力を、今度はもう一度、大学へフィードバックして、大学内でのネットワーク作りに生かせればと思います。

●片桐

地域に出て、学生たちと一緒に活動していると思うことは、今日の議論もそうですが、そこで学生たちが「何を学んでいるのか」ということだと思います。生きていく上での土台になるような力を学んでいる部分と、専門を生かして社会の仕組みの中で生かせることを実際に出していかなければいけない部分と、それは分けていかなければいけないのだと思うのです。僕自身としてはどちらかというと、地域によって育てられてい

るのは土台の部分になるのかな、と思っています。

例えば、静岡から出て行く人間がたくさんいるという議論もそうですが、もしかすると、地域での活動は、静岡の中に実はもっといろんな豊かさがあるということ気付かせる場にもなりうる。物の見方を相対化してくれる場所が地域であり、過疎地だとか山間地といわれているところに、それがあるんだろうなと思いつながら活動をやっています。

それから、さっき伊藤さんがおっしゃった「伝えること」はとても大切だと思います。地域に出て学生たちが本当に主体的にやるということは、試行錯誤することに他ならない。その試行錯誤していく過程をきちんと伝えるのが、大学の役目だろうと思います。結果よりもプロセスをきちっと伝えていく場を作ろうということで、学生の声で8割から9割を埋めた報告書を作成し、学生主体の報告会をやりました。

今日こちらに来て、私たちがついこの間、3月にまとめとしてやったことを、静岡大学さんはこれから始めるというタイミングで、学生の声を主体にしたこういうシンポジウムを開いていることを、僕はちょっと羨ましいなと思っています。

●満井

ありがとうございます。

時間が足りなくて、全員の方に発言いただくことができませんでした。大変申し訳なかったと思います。限られた時間の中で、いくつかの課題と、新しい展望と、その解決のためのヒントをいただけたとすれば、今日のこのシンポジウムの価値はあったのではないのでしょうか。

また第2回、第3回が開催されることを祈りつつ、これでシンポジウムを閉幕させていただきます。どうもありがとうございました。

静岡大学地域連携協働センター公開シンポジウム
報告書

**地域と大学をつなぐ
～メディアイターとしての学生～**

発行日— 2010 年 3 月 31 日

編 集—静岡大学生涯学習教育研究センター
〒 422-8529 静岡市駿河区大谷 836
☎ 054-238-4817 (FAX 兼)

発 行—静岡大学地域連携協働センター
静岡大学生涯学習教育研究センター

印 刷—中部印刷株式会社